イ 5
1615

山東菴主人随筆

近世奇跡考

東都書房　青山堂梓

門號 1615 巻

奇跡考序

搬演傳奇之書。爽々朗々。試天說人之話。皆可以導愚發癡。奇々怪々可驚一心懼之事。皆可以開心豁胸。甚戲謔快適之以資談柄。可以祛長夜之惡魔洽千秋之熱血矣。其醜人之初以爲小兒戲矣。然傳奇之

體。以不遵其原。不据其口也。影撰百般呈偽。溷真為迷作之巧。故技造化先生之人。於三千界之裏。抽一旦古來古今之事。於億萬劫間。立于閒劇見巧。肆詭詞。以美青天白日之世界。乎彼話。漫漬委巷婦女子耳目。淪浹士君子之骨髓。

竟使古人偉事冤誣湮沒不傳。埋冤失信。長其誣世之害。亦為不少矣。醒之先人長於戲文。恒作謬悠無稽之詞。寫人舍無邊之情。行之單辭。使讀者解頤而不止。欺以其傳於名於世。須兆人就乎無根傳言。而考其有据之事。蹤跡搜

往時之實。近雜俗說之妄誕。裒錄爲五卷。名曰十六夜奇蹤考云。一日携酒訪余村居。余時會客行酒。老人亦解飲。在席末。探懷出一小冊子。謂余曰。願假先生一言以增價焉。余已沾醉。乃笑而頷之。其夜客已散。將就眠。時皓月尚射窻。杜鵑頻傳纔。因挑燈側枕。繙老人書。仰臥覽之。初翻三四葉。順流讀過。則捜至跡幽蹤。而漸至佳境。者如武陵桃源。步々着勝地。愈讀至其半。則行可字裏破支離傳會之浮說者。如入洞出洞。而終遊於世界。讀至百丁來。則閭閻所未定

見所未見者如睹晃相會魏晋以上之事矣其博稽細捜使二百年間偉事叢説之湮没埋冤者洗雪抉擿縦然再表白於今日焉又其仿拾古人之遺画者往昔之風俗時態而證之其意恰爽朗醒士君子之眼者非前日戯文措偽取媚之類也其決決解亞之功亦不啻不自畧不廢一全篇讀畢而掩巻則村鐘報曙遂興掃閙窓手自動印酒二杯攬筆而書之

暦紀文化元年甲子五月龍背生月

関東酔翁　鵬斎　撰

二百年來都會
地太平時節喜
重生栗華不盡
江東作又是人間
極樂坊 一杖

凡例

○好古を好る人その代を考てふるきことゝもあきらかにあり千歳の物もふる時ありて今あらハるもあれど近き世の考ハかへりて疎にして實を失ふるすくなからず偶口碑に傳ふるも虚妄のことぞおほかる後の世にハ又今をいにしへとして志らむ人もあるべきかのをとなとおもひよりしより物を秘篋に索事を珍書に探舊蹟により古墳をたづねふかく思を致して其實を得ことあれバやがてかきつけゝる又故古華箎にみちぬそのうち俗耳にちかきすいくだくを撰出して遂に劂人をもよふしむ

○たとひ片言隻辭といへどもたゞしき據を得ざれバいそぞ

奇を好にまかせてあらぬ虚譚を述、考據ふして口碑の誤を傳ふる説とおなじく見らるゝ事あられなばあなかしこ予が考のあたらざるもおほかるべければ後鑑を俟てあきらかにせむのみ

○凡正史を以ておよばざる事を記するものハこの世にあることを見むにハ便なく近く源氏物語ハさらなりごとの書なれど其代のさまを考るにハこれが引もちふるごとく浅井了意井原西鶴等がさうしれ書雛屋立圃菱川師宣等がされ絵のたぐひもその代のおもむきをもてかけるハいふもさらなりてあるごとさまなりて證とすべきものおほかるをその中に俗書といへども實さおなじきハそのもちゐぬ引もちふる書名の下に上木の年號を志るそハそれ〴〵の時代をしらしむべきためなり

○おもひ得たる時いそがはしくかきつけたる稿本のまゝ上木しぬれバついでをさだめずいふことも前後し且くさなれるもあるべし覧者あやしむことなかれもとより俗に近きをむねとすれバ目なれざる雅文目なれざる雅字をもちゐず識者のためにハあらざれバあやまりおほかるべきこそおほかるめ

○證とすべき古画あれバ原本をさながらうつしいだして露なるまゝなぐくぞあらふハせり古圖なきハ其代のおもむきを考てあらたに画しむ古圖と新画とハ画風を以てわかち見るべし古圖ハすべて予が自画なり覧者あやまりて予が筆のつたなきを画者におふすることなかれ

○此書すべてよしなしごとをかきつけたるものにハあれど今に

あはれ百歳のいにしへをえ昔の質素をおもひて費をを
ぶらむにはあらしくもちふる所あきらにしるあらじもし後の
世に今をいにしへとして志たふ人あらばいさゝかそ人の便
あらむ歟

文化紀元甲子春三月

江戸　醒々齋誌

近世奇跡考總目録

巻之一

一 懸想文賣
二 上野花見
三 縫箔小袖
四 六尺袖
五 氣保頭巾
六 浅草海苔
七 （へ）夜入道
八 女歌舞妓ろうさ太夫
九 左甚五郎家譜
十 高砂屋看板
十一 三谷馬駄賃附
十二 土手馬
十三 山中平九郎鬼女話
十四 成瀬川土左衛門
十五 丸山筒花入
十六 相撲櫛
十七 土手道哲并高尾
十八 小歌八兵衛

巻之二

一 佐文山戲書
二 紀文傳
三 宗珉一輪牡丹目貫
四 久米平内石像考
五 右近人形
六 小兵衛人形
七 羽生村累古跡
八 歌比丘尼
九 安樂菴落語
十 露の五郎兵衛辻話
十一 鹿野武左衛門仕形話
十二 大津繪考
十三 辰之助鎗踊猫狂言并肖像

巻之三

一 古画相撲圖
二 牛若木偶衣裳
三 淺草並木櫻并淺草寺船形手水鉢
四 吉弥結帯
五 岡崎女郎衆
六 古代山葵擦圖
七 榎本其角傳
八 其角雨乞句考
九 金龍山奈良茶飯
十 芝神明千木櫃考

巻之四

一 夢市郎兵衛明石志賀之助事
二 秋色櫻并短冊
三 高尾所持鬢水入圖
四 元祖團十郎傳并肖像
五 一蝶贈宗珉文
六 淺草六地藏石燈籠
七 淺草楊枝店始原
八 白炭忠知
九 三浦高尾考
十 万治高尾出生地
十一 薩摩小平太
十二 虎屋七右衛門芝居
十三 英一蝶大津繪讃
十四 浮世又兵衛江口君圖
十五 大高子葉烟管筒
十六 深見十左衛門傳

巻之五

㊀英一蝶傳　㊁朝妻船讃考
㊂簸懸讃考　㊃助六狂言考
㊄十寸見河東傳　㊅竹婦人傳
㊆万字屋玉菊傳　㊇玉菊拳まり
㊈腕の喜三郎　㊉鎌田又八
(十一)加賀千代尼傳　(十二)大橋柳町考
(十三)地黄坊樽次酒戦　(十四)鹿藏猿次郎

以上　通計七十一條

目録終

近世奇跡考巻之一

江戸　山東軒主人著

㊀懸想文賣

浅井了意が曽呂里狂歌咄（寛文十二年板本）曰。往當正月元日のあしたより十五日まで。年毎に懸想文とて賣けり。其出立は赤き布衣に袴のそばをかくとり。猶それより前には烏帽子を着せけるや。中ごろは編笠をかぶり覆面して。都の町々を賣けり。是を買人あれば。ほそき畳紙の中に洗米二三粒入たるを。懸想文と名づけて渡す。一銭より百銭まで。代は人の心にまかす。扨その祝言は買る人。あるひは夫婦のかたらひのこと。或は商賣のこと。又は物かくす。その外何事も。のぞむ事を。さまぐめでたくいひつけておくる。そ

懸想文賣圖

寛文十二年印本
曽呂里狂哥咄
古画ヲ摸出ス

元禄六年板本
誹諧糸屑に
懸想文賣のうたを狂哥咄の
説をおなじけれバ
ここにもしるしつ

詞花堂藏本

おもしろく賣ける詞也。きくとえしを時世のありさまにおしうつされ。今ハことに絶けるにや。此ごろのうき人ハ志りくらし。是ハ祇園の犬神人ツルメソありや。又ハ桂の里より出る男にや。そのおもむきを知らず。

〇按るに。懸想文といへるハ。女丈のきぬにかけるものにハあらず。紙符を懸想文となづけて。いまだ嫁せざる女の良縁をいのりしものならめ。已に寛文の比さへさるうな文以て諷べし ◯俳諧の季子よせに入しハ。寛文三年印本[増山の井]にみゆるがごとし。その以前にも見えるやあらし

㊁ 上野花見

[紫一本]に云。東叡山黒門より。仁王門までの並木の桜の下に。花見の幕。松山のうち清水のしろに幕をしらひて見る人おほし。幕のおほき時ハ三百余あり。すくなき時ハ二百あまり有。此外につねにちゞる女房の上着の小袖。男の羽おりを。糸当たげる細引をわして。桜の木にむすびつけて。かりの幕にして。毛氈花むしろをしきて

酒のむゝ鳴物ハなかりき。小歌浄瑠璃踊仕舞ハさらにするもなし。本町通り町を始。有徳なるもさもなきも。町々にて女房娘。正月の小袖と云ハ仕立ぞ。花見小袖とて或ハそでをこめ。結構にしてある物ゆゑに着るを着ておる之。花よりなほ見るにくし。花の頃ハ空くもりておほかた昼過より雨ふる。しかれども傘をもさゝずぞ。よき小袖をきさそぬれてくるを。妬山にも又手がらにせしと云（此文天和中のありさまをこまかにあらはせるごとし）

○其頃の婦女の小袖ハ結構といへども絹紬をかきつけたる程にて今よりみれバ甚質素なるものなり

㊂ 縫箔小袖

昔の婦女ハ。縫箔の小袖を礼服とせり。京六条に傾城町ありし時。寛永の頃までハ。極女も地なし縫箔の小袖。摺り箔の小袖を着たるなり。島

原なかりしより縫箔といつたの鹿子を禁せられしよし。箕山が[大鑑]（延宝中写本）に又田舎好事の者。器物のかざりなどに用て今に残れるをみるに。絹に麁界なる縫をして。ところどころ摺箔をしたるものなり。今地白地黒などと云もの。其遺製歟。いつの頃にか金糸の繡いできて縫箔ハやみ唯縫箔屋と云名のミ残れり

古代といへども縫箔ハなみなみの者の着ることあたハざる衣服之しかれどもおほくハ絹の地にて縫も甚麁界なり。これ等をみても昔の質素をおもふべし

㊃ 六尺袖

延宝天和のころまでハ。一尺五寸を大なり袖と云。されバ六尺袖をきるといひしハ。其頃のことなりぞ。（一尺五寸四ツ合て六尺袖之）春臺の[獨語]にすべての男女の衣服むかしハ極て質素之。男子も女子も。十四五までハながき袖なきハなかりしに。昔ハむかしら尺の一尺七八寸を。極りとせしに。貞享の頃より二

天和年間
上野花見圖

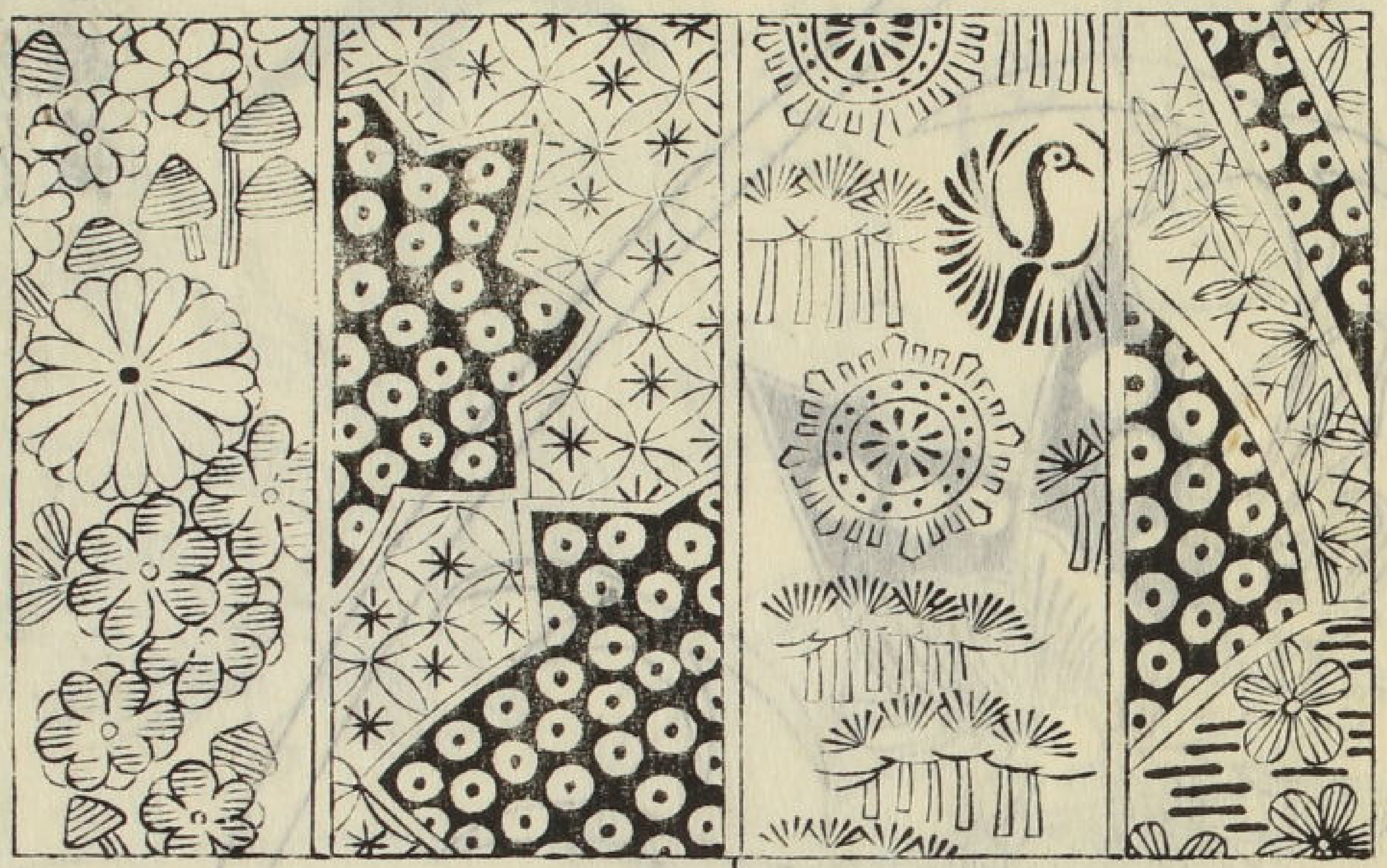
尺なりしにありし。夫よりやうやく長くありて。近きころは二尺四五寸になりぬと云。○一蝶が四季繪跋に。髮のつとゑりをこえぬ。あり袖大路をはらふとは書しも。延宝天和の頃も。享保のころと大に風俗のかはりたることをしるべきなり

⑤ 氣侭頭巾（きまゝづきん）

【獨語（どくご）】に。江戸の婦女（ふぢよ）外にいづるに。昔（むかし）は氣侭（きまゝ）とてくろき絹にて頭面（めん）をつゝみ目ばかりをあらはし〳〵。其後綿にて頭面をつゝみしは。我廿あまり宝永の比まで有りきと云て案（あん）ずるに。今江戸に。お高祖（そ）頭巾（きん）と云もの。氣（き）まゝ頭巾の遺製（いせい）ならん

【五元集】目ばかりを氣侭（きまゝ）頭巾（づきん）の浮世哉　其角

○縫箔（ぬひはく）



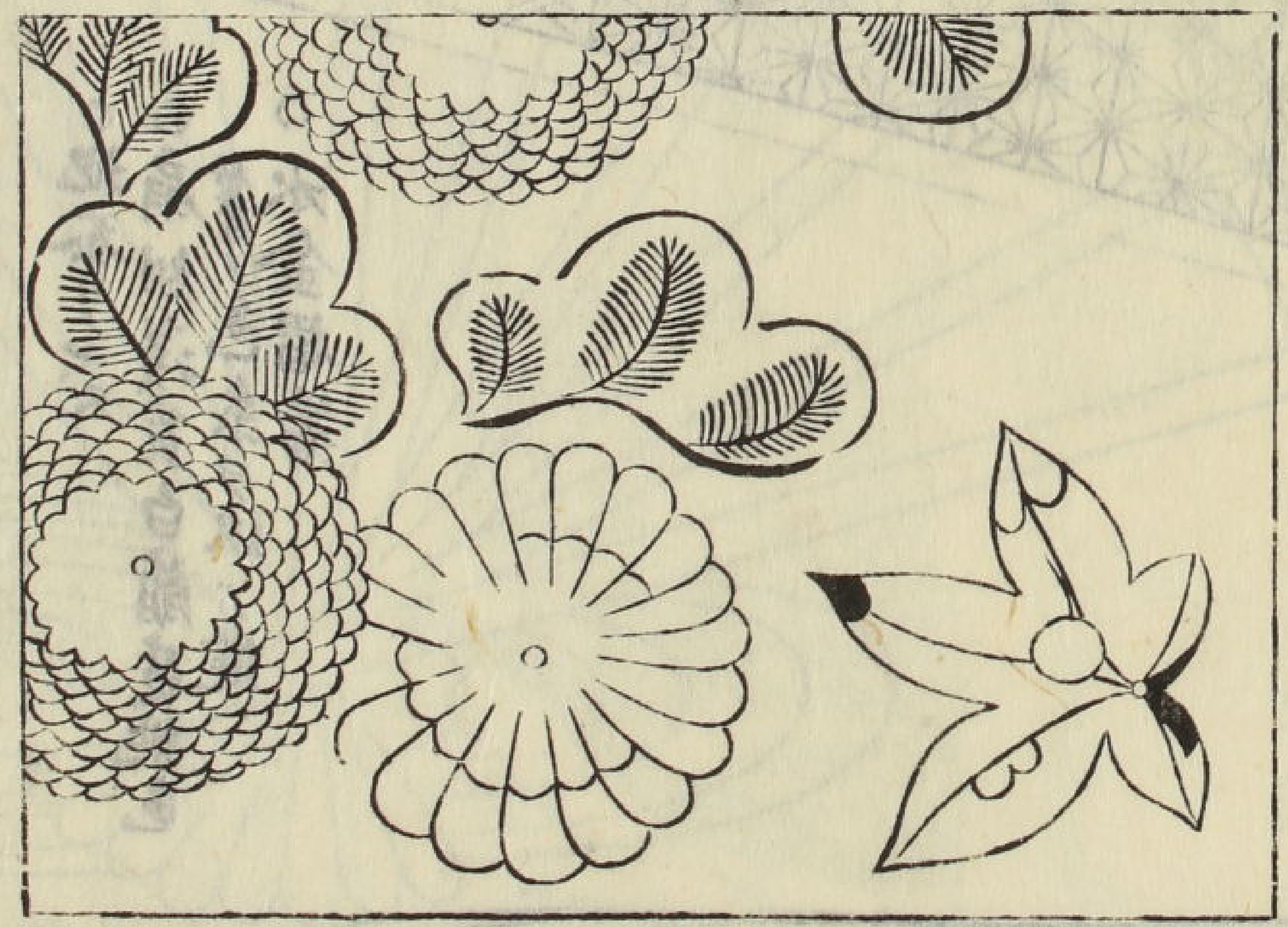
木村太朝藏

地紫リンズ。縫糸青黄赤。鶴リンボウ菊スベテ箔

此ヘリスベテ箔

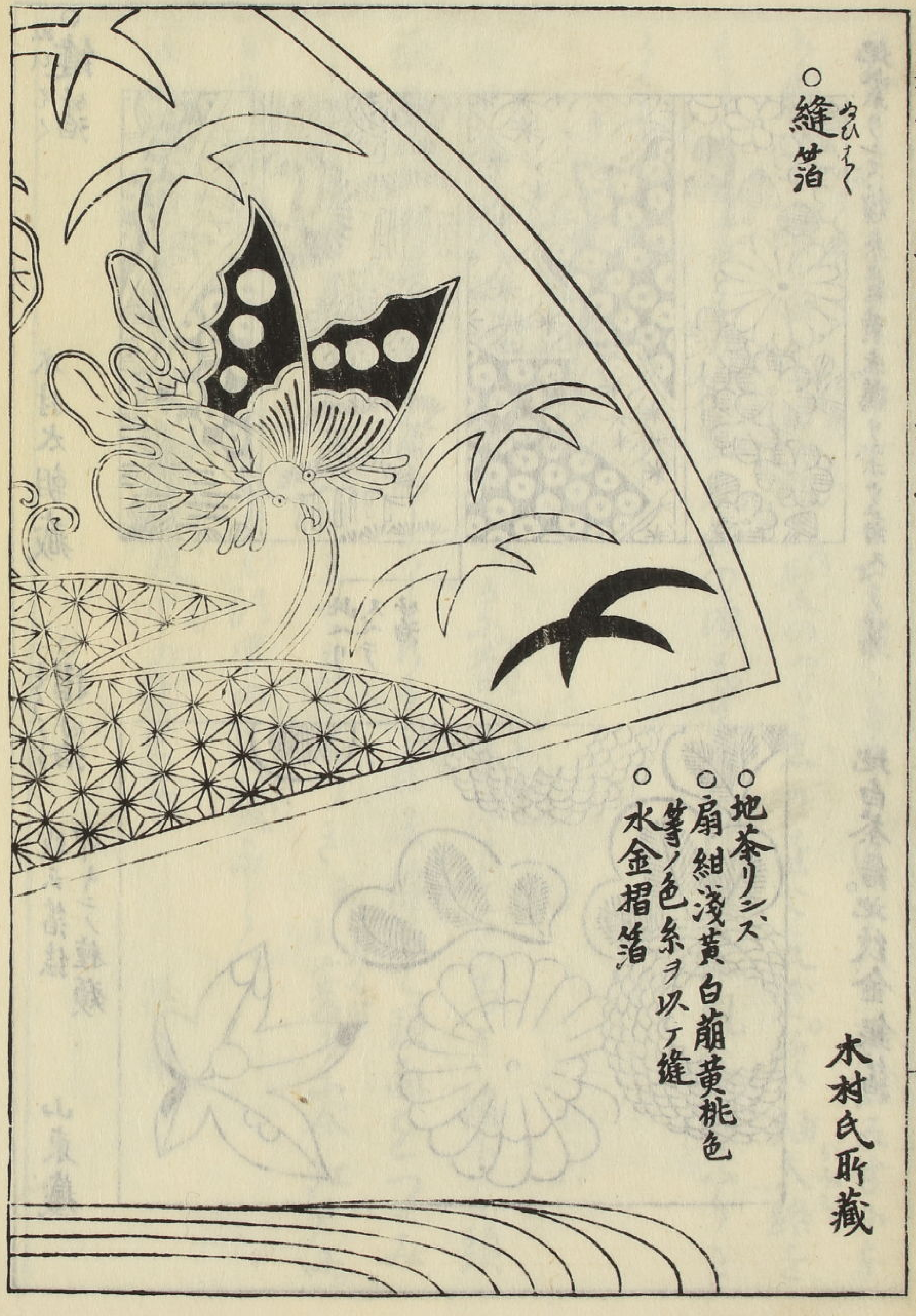
○摺箔（すりはく）

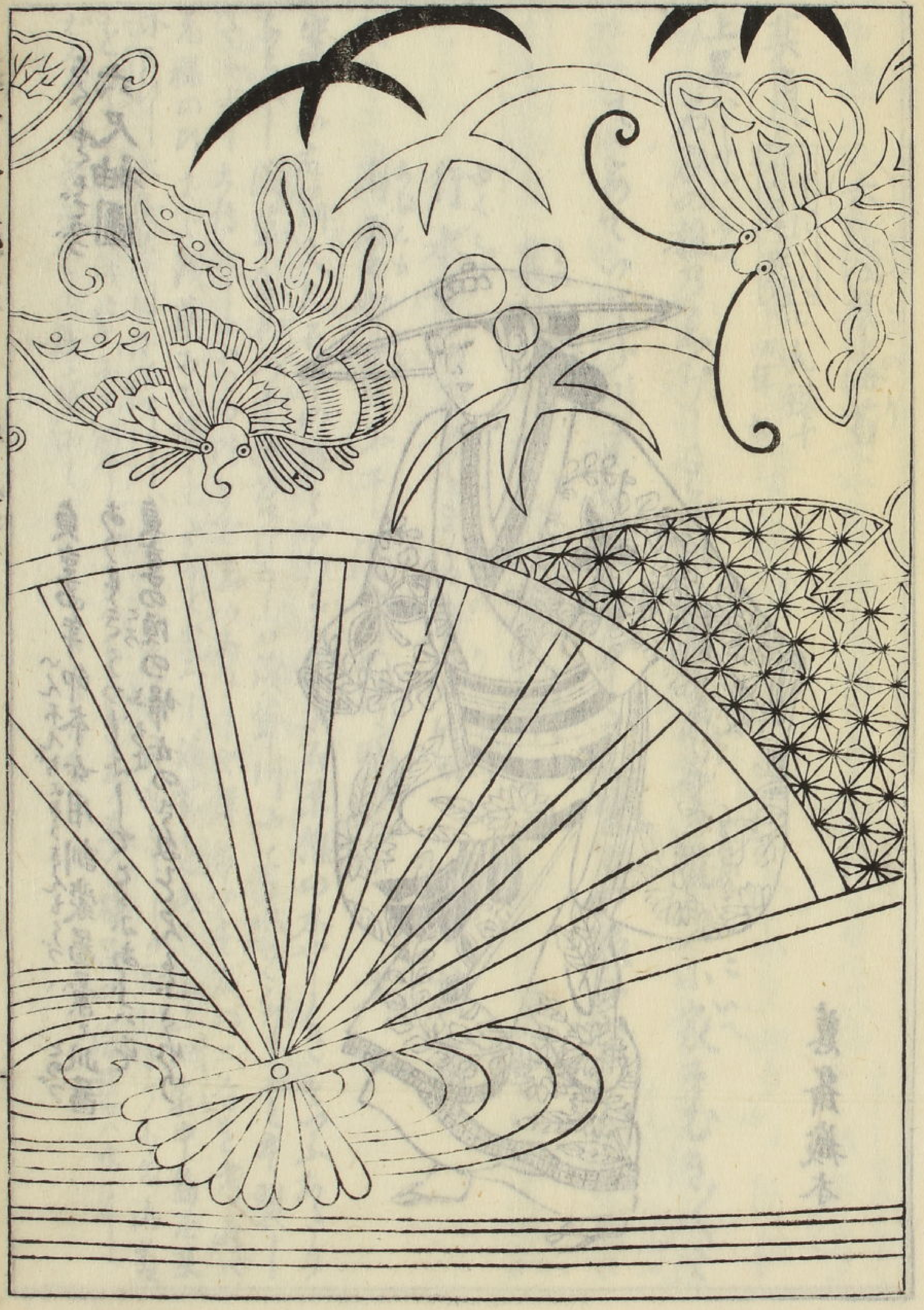
或云箔絵印キンノ種類



山東藏

地白茶繻。地紋金銀箔


○縫箔（ぬひはく）
○地茶リンス、
○扇紺浅黄白萌黄桃色
筭ノ色糸ヲ以テ縫
○水金摺箔
木村氏所蔵



六尺袖図

貞享四年印本女用訓蒙図彙に此図ありもとさうつしぬしてこゝにあらハす
貞享の頃の婦女のさまを見るべきなり

六　浅草海苔

其角　焦尾琴　元禄十四年板

上略　石原の椎乃もとげしばしこぶしに人目まれなる境に小家をむすびてこあてのさふ川すぢ残漫しける皆この流に入

其引　所の産を寄て

行水や何にとゞまる海苔の味　其角

雨雲や簀に干海苔の片明り　文士

案るに右嗣文に石原の椎とかけるハ本所石原椎の木やしきをさしてよめり　さあるべし浅草名物の干海苔むかしハ浅草川にてこれをとりそこにて製したるよし云伝れどもいつの比まであり　しや詳ならず　右の二句を考ればえ元禄の比まで浅草にて製しけるとおぼし　海苔をあさくさと旧家中島屋某ハいひし　ハ浅草川にてとりしハさるに遠きことをさしゝが品川より来る海苔をとりよせて浅草にて製しけるゆへ　ちかきまで極品の海苔ハ昨年しまでも浅草にてせいしけりき

⑦ へ(ヨムシ)夜入道

こゝろ火のなそふれにゐがくへまむし夜入ゐふるさすの虫や

山の井

望月の影をなほよく似たる哉さ男ひ会そ

縫に似たるりんやへ(ヨムシ)夜半の月　雛屋　立圃

此句正保の頃の吟之

そゞろ物語

⑧ 女歌舞妓のはじき太夫

みな見しハ今より原町大門通りに有シ時代にて来ル三月五日のはじき太夫かぶきをどりありて日本橋に高札をたつる江戸に名を得し女かぶきおほしそいてぶる中にもたゞはじき太夫ハ世に越ス人あかくちゆさしく容顔ハ美麗ありければ此かぶ舞妓をこそ人あと老若貴賤くんじゆ見物を云く　同時中橋にいく島丹後守といふ女舞妓ありけるよし日書に入たる 予が骨董集ニくハしくまるせり

○右そゞろ物語ハ寛永十八年の板本之　杏園蔵本

⑨ 左り甚五郎家譜

仏殿山門等の彫物古雅なる人来由しらざるもみだりに左り甚五郎が作なりといひて名誉をしめすどもいづれの時代の所の人とも云ず詳に知る人なし予其譜を得て始て時代をも知る左の如し

左甚五郎　伏見人　寛永十一甲戌年四月廿八日卒　四十一歳

左宗心　元禄十五壬午年三月十五日卒　七十一歳

左勝政　京今出川寺町住　享保十二丁未年五月十三日卒

以下略

元禄三年板人倫訓蒙図彙に天正のころ左りと号する名人ありと云

亀文翁云左甚五郎ハ関東にハ不来播州明石に住りしとぞ

(十) 高砂屋肴板

日本橋室町一丁目商家の軒の上に高砂尉姥の古き木偶あり左り甚五郎が作と云傳ふ安置する所ハ是高砂屋清左衛門といふ菓子屋の肴板也其ハ菓子屋ハ貞享板の江戸鹿子にものりたる舊家にて宝暦の比迄ハこゝに住しが他所へ轉宅せし時彼木偶に霊ありて不思議のことどもおほく此地をさることをきらふによりてせんかたなくこゝに殘しおきぬ今ハ不用のものなれどもかゝる霊あることをおそれてとりのけずとぞ。さるものゝみもあらねど一百余年を歴たる古物なく火災をのがれて今に殘れるハめづらし

(十一) 三谷馬駄賃附

むかし三谷通の若人等ハ白馬白鞘の刀白革の袴白ちりめんの袖ぞうりあぶみまで白きを以て風流のすることぞ。寛文二年板【小歌惣まくり】と云本にみえたるによりて三谷へ通ひし駄賃附あり。左の如し

所々より吉原迄駄賃附の事

一日本づゝみより大門まで　並だちん弐百もん
馬奴二人こむろぶしうたふかざり白馬駄賃三百四十八文

一飯田町より大門まで　並だちん弐百もん
まご二人こむろぶしうたふ錺白馬駄賃三百四十八文

一浅草見附より大門迄　並だちん百三十二文
馬子二人こむろぶしうたふかざり白馬だちん二百四十八文

是白馬を好みし証く。又明暦の頃の小歌に。春の日のいとまあらばて柳さくらをこきまぜて。おもしろき馬にめしてこよひこゝにひくとばし。

白馬騎不行章臺折楊柳と云唐詩の白をやもふげゝる歌ふ
ろし又白くゝりの袖べりを好みし証あり 五元集 に

袖裏や茄よりけふ白くゝり　其角

今の世歌舞妓狂言六方丹前の奴僕ふ扮するふ白羊ゐり白袖
口白裏白キ帶なぞ用ゐるぞこれふ古風の残れるなるし

（十二）土手馬

浅草寺境内ふ馬道と云名の残れるハ三谷なるの通路なる也是之
日

五元集 朝嵐馬の目でわく頭巾哉　其角

土手の馬ゝりんをひげふ菜つみ哉　日

右の白ふ土手馬とゐるハ三谷馬のなすべ今日本堤ふ立て船ふくと
よびふ船人を土手馬といひ嫖客ふつきそ揚銭とりふ行日雇の
者を付馬と云も。むかしの遺言なり

（十三）山中平九郎鬼女話

普世ふかゝる話あれども。ふくろーかふぞ傳へていふ。山中平九郎一時
我家の二階ふ上りて鏡ふむかひ狂言怨霊の顔をさまぐふ工夫し。
さやせんとやもべをを眼をよせ口を許ゝきゝ心ふ学バせて志づふ
くおもひをこらし。自然とおのれも。おそろしきなりの仕ぐを
工夫しかくてこそよけれと。鏡をまふありて。おぼえず立上り。
怨霊の身ぶりをもる折しも。其妻何の心もなく二階ふ上り。おもひ
かけぞ。其ありさまを見て。こハやのりとさけびてのけさまふたふれ
て死入りぬ家内の者その音ふおどろきて二階ふあつまり。氣付
薬ふぞあたへ。やうくして甦りぬ。平九郎男ひれなハ我

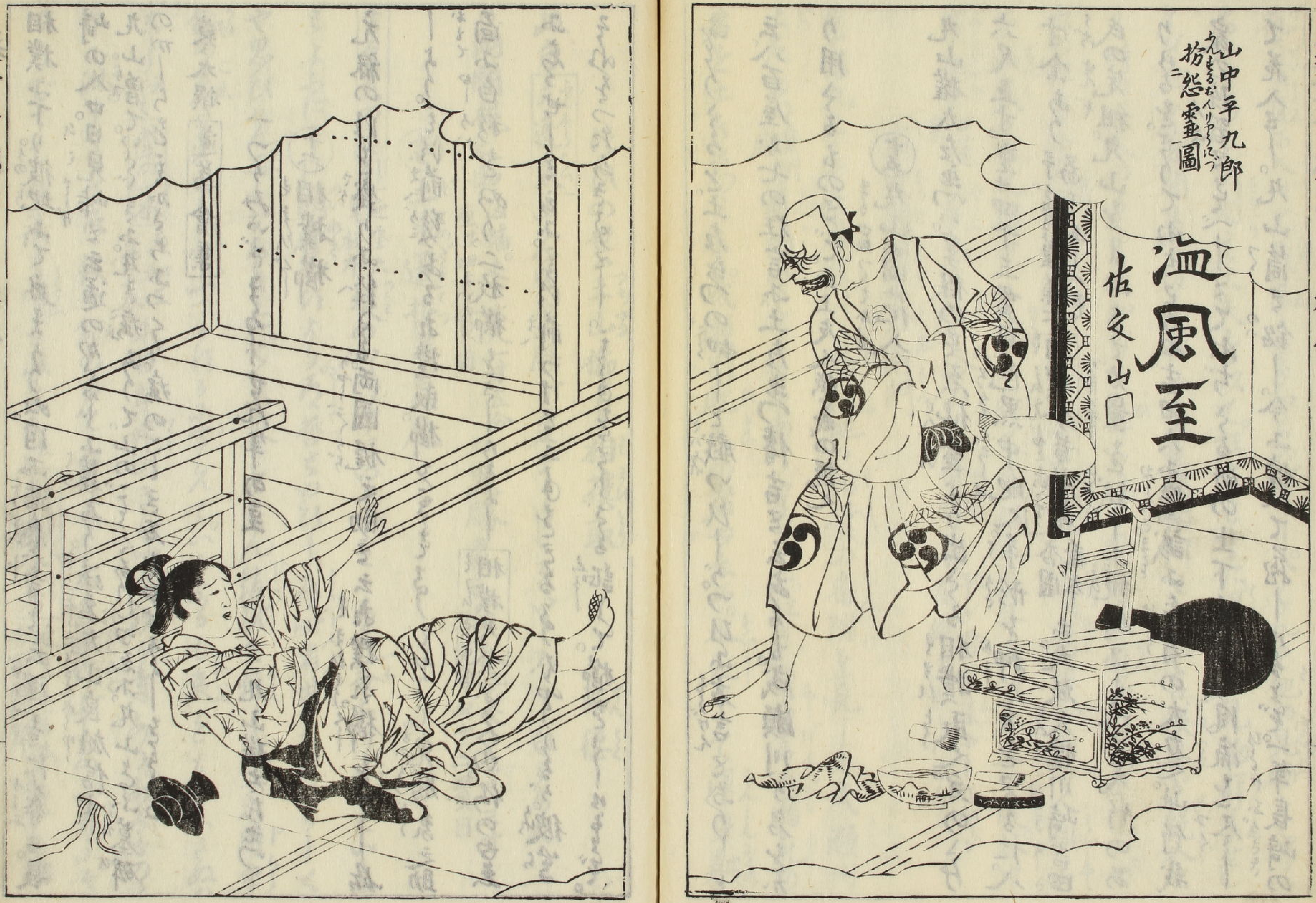
藝精身に入りて我妻をかくのごとし。いかんや他の見物をや。大によろこび則ち工夫を以て狂言せしに果して見物群集せしとぞ［江戸著聞集］といふ書に妻ゑ隅田川と云狂言。彼妻が絶入せし時の工夫のよしをかけるは非なり。それより以前のことのよし。いづれの狂言にや詳ならず。案るに平九郎は實悪古今の名人俳名を仙家と云。元禄中を盛に経て享保九辰年五月十五日没。谷中常在寺 日蓮宗 に葬る。法名を冷山院寿仙と云 予が骨董集に平九郎が肖像をあらはせり

(十四)成瀬川土左衛門

享保九年午六月深川八幡社地の相撲の番附を見しに。成瀬川土左衛門 奥州前頭の座 のしめにあり。案るに。江戸の方言に溺死の者を土左衛門と云は。成瀬川肥大の者なるに。水死して渾身暴ふくれたるを土左衛門の如しと戯ていひしが。つひに方言となりしと云。八百屋お七の狂言に土左衛門伝吉と云あるも。成瀬川が名をかり用ゐるものとぞ。以上友人照義の説之

(十五)丸山筒花入

丸山権太左衛門は。享保のころ仙臺より出たる相撲取也。身のたけ六尺五寸。重サ四十三貫目。色黒中肥也。手形を押たるを見るに。八寸余あり 予が骨董集に図をあらはせり ［相撲今昔物語］ 杏園蔵本 云。大坂天満川崎吉田氏の先祖。丸山をまねきて力量を試しに。視竹にすべき大竹のありけるをとりてねぢわりぬ。吉田大に驚き誠に希有の大力也。此竹我家の珍器とすべしとて。ねぢたる竹の上下をきり。風流を尽して花入とし。丸山筒と銘し。今に伝へて秘しけるとぞ。一年長崎の



山中平九郎扮（えんまるおんりやうにつ）怨霊図

相撲に下り彼地にて身まかりぬ。因て浩臺寺と云禪寺に葬る。長崎の入口日見峠と云道のかたはらに墓あり。法名九山良雄信士。丸山曽てつくぐるに。丸き塚ありて山のごとくありし由云に。丸山といふ墓碑のかしらを見かさちにつくり塚のごとき石をおけるよしをきこえぬ

蓼太撰［蓮華會集］

一つるみいざまはりせん年の豆　　丸山権左衛門

（十六）相撲櫛

元禄の頃を盛りに経る。両國梶之助と云相撲取櫛をさし始しより。其頃前髪ある相撲取櫛をさしけるとなりて。鬼勝象之助面に白粉をぬり。二枚櫛をさしけるよし［相撲大全］に見ゆ。依の意にあらせしと云み。其頃前つけと云ものをとる事もありけるが。彼等それをつけたるあきらめし。ことりをとらざる証とて。櫛をさしけるとぞ。

浅ひの世は土山櫛を相撲取　　治徳

此句［文蓮莱］に見ゆ。鬼勝が身まかりしをいたみし句なるべん

○両國梶之助　因幡。丈ケ六尺一寸五分　重サ四十貫目　○鬼勝象之助　紀伊。丈ケ七尺三寸　重サ四十二貫目

（十七）土手道哲并高尾

［吉原恋の道引］延宝六年板本　堤のかたはらにかきつらなる庵あり。是をいふことよみた。むかし明暦の頃より道哲といひし道心者世をむつかしくや思ひけん。形もおそろしく庵をあん結びて住しが。二六時中鉦の声たえせず。此ふつうのにきこえて。いかなるも哀をもよほさぬはなし云々［紫の一本］天和三年写本に日本堤の道哲が寺あり。あるものをに淋しきを道哲が鉦の声てあり。今も無百作ぶしの小哥にぞつちでうて道哲を唱も此寺之事云［事跡合考］延享三写本　杏園範卒に今戸橋

新多越の南の木戸ぎハ西方寺と云寺の前かし土高き所空地にて十
間斗りの廣さ幅八二間ぎかりもあらん所昔つみんぞを刑せられ
しかふ之その時ある哲と云る心者。彼罪人仏果得脱の為に昼夜念
仏しかりしが滅後此西方寺に葬りし由なふ。ある哲の唱ありと云 [治涼説]
ふ弘願山専称院西方寺ハ開山念誉上人之巡誉ある哲ハ住職にあらぞ。
常念仏発起の願主ある心者之徳ある僧にて世人當寺開山のやうれ
云来れりと云

案るにある哲在俗の時三浦屋の高尾が私夫なりと云ハ妄説之 [事跡]
[合考]の説のごとく罪人得脱抜苦の為定念仏しけるに吉原のころ
よざる以前より住しある心者なるを疑なし。土佐ぶし [三世二河白]
[道]を云ふに高尾ある哲が教化によりて成仏しけるよしを作りし

より屋妾を僧へしあらん予西方寺にいたりてたづぬるにある哲万治三
年十二月廿五日。高尾と同日に寂すと云。されど [高尾の考引] にある哲菴
の畫を出せるを見。[紫の一本] の文を考ぬれバ。延宝天和の頃までながらへ
てやうに思ゆ。ある哲が墓の年月を記さゞる由ゑに詳ならぬとえんさり

○汗かきの弥陀　立像三尺。安弥作。ある哲持仏。今西方寺本尊是之

○道哲之墓　同寺にあり。ある哲の石像定念仏の姿をきざむ　法号年月等なきさぞ

○高尾襟掛地蔵　涸仏立像。一寸八分。高尾守袋へ入し仏なり。同寺にあり

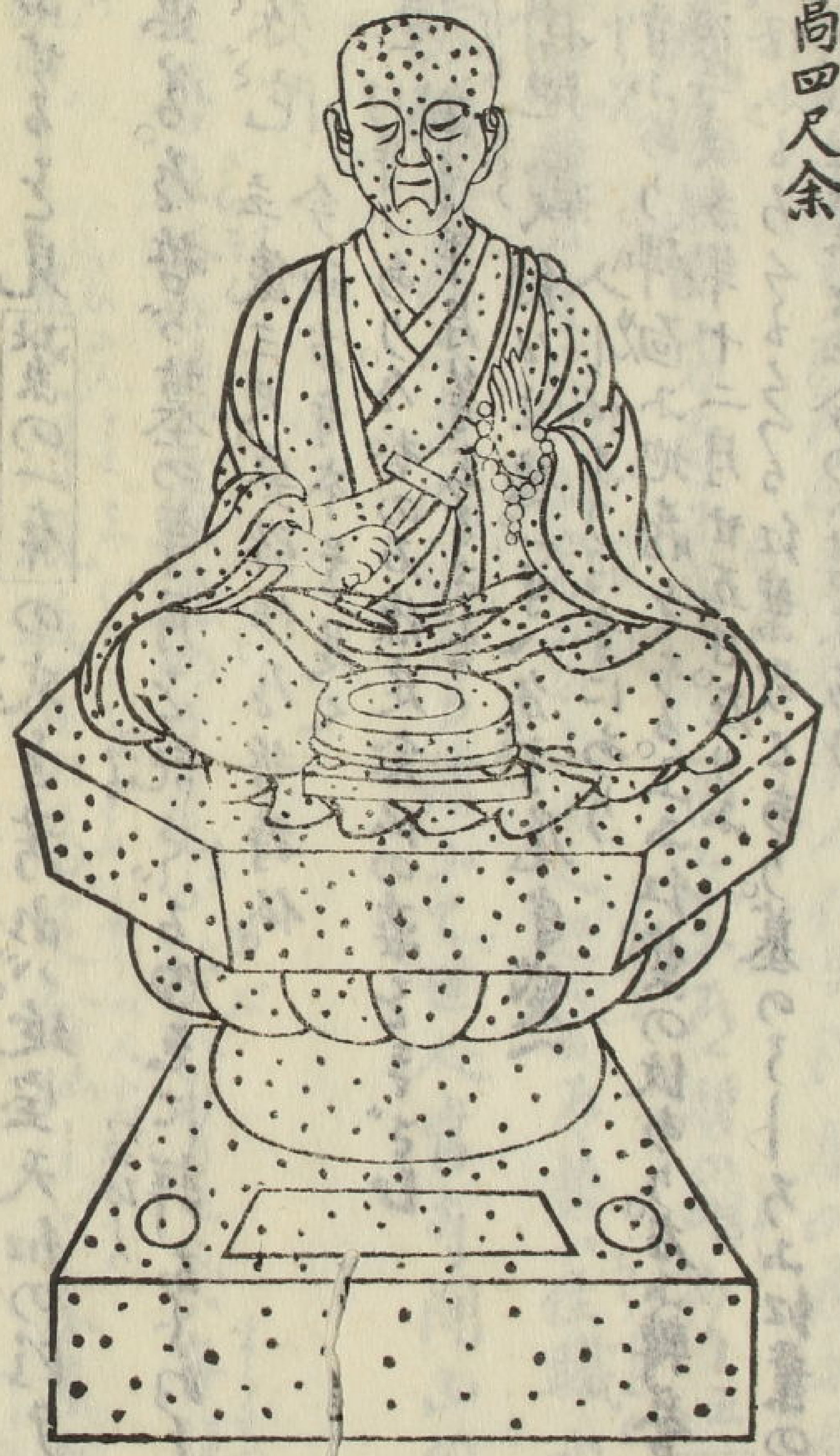
○同墓　同寺にあり。碑面に地蔵をなる。上に紅葉の紋あり。右に轉誉妙身信女　万治三庚子年十二月廿五日。左りに
[寒]但にもちらるる紅葉哉　とあり。墓のうしろに紅葉の木あり。　高尾の紅葉と云。今のハ若木なり

○同位牌　同寺にあり。法名前の如し。　惣高二尺余

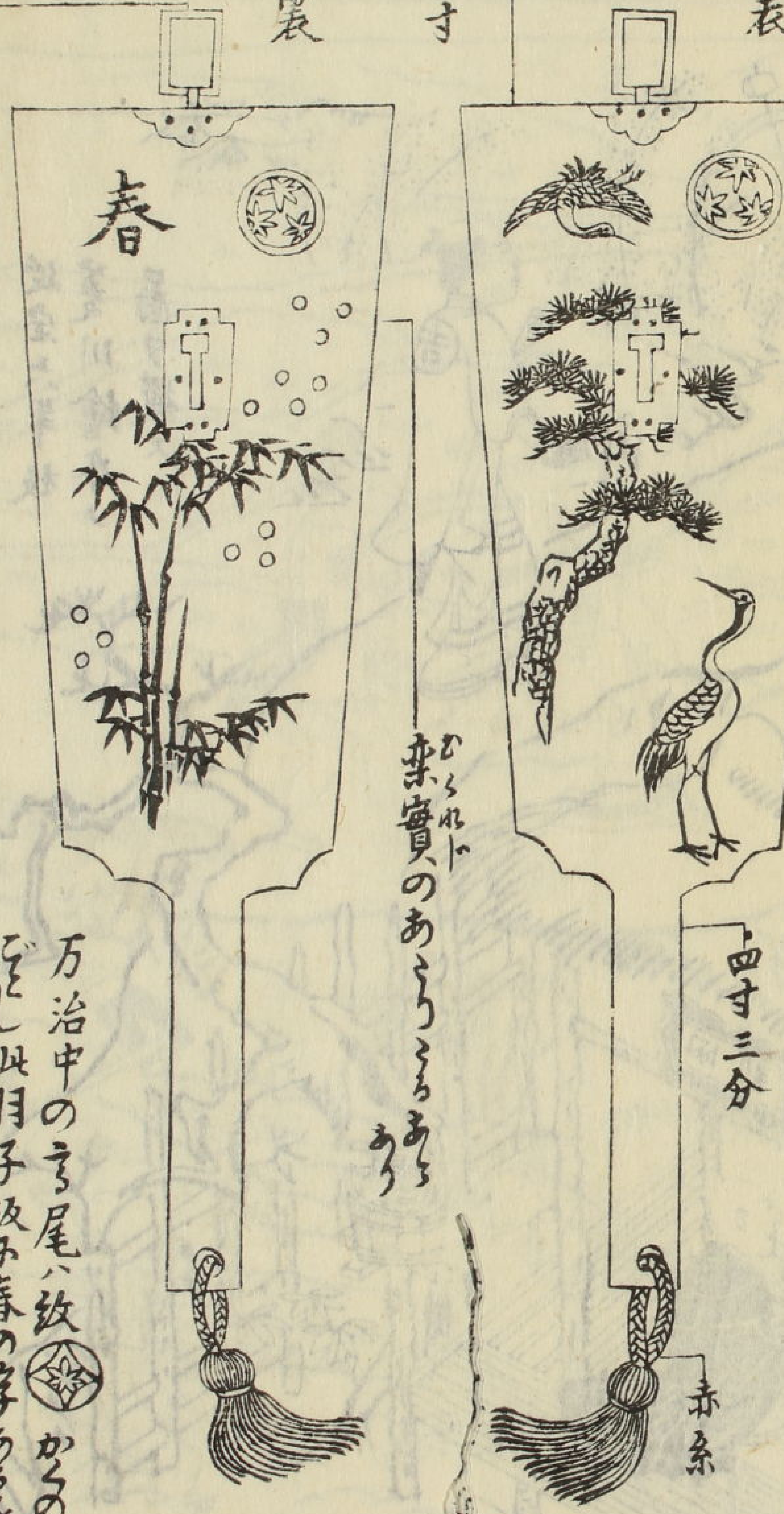
○同所持羽子板　同寺にあり。下に畫をあらハせ

道哲墓之圖

惣高四尺余



高尾所持羽子板圖



表裏ともに惣金。摸様墨蒔繪。紋朱。古風なるもの也

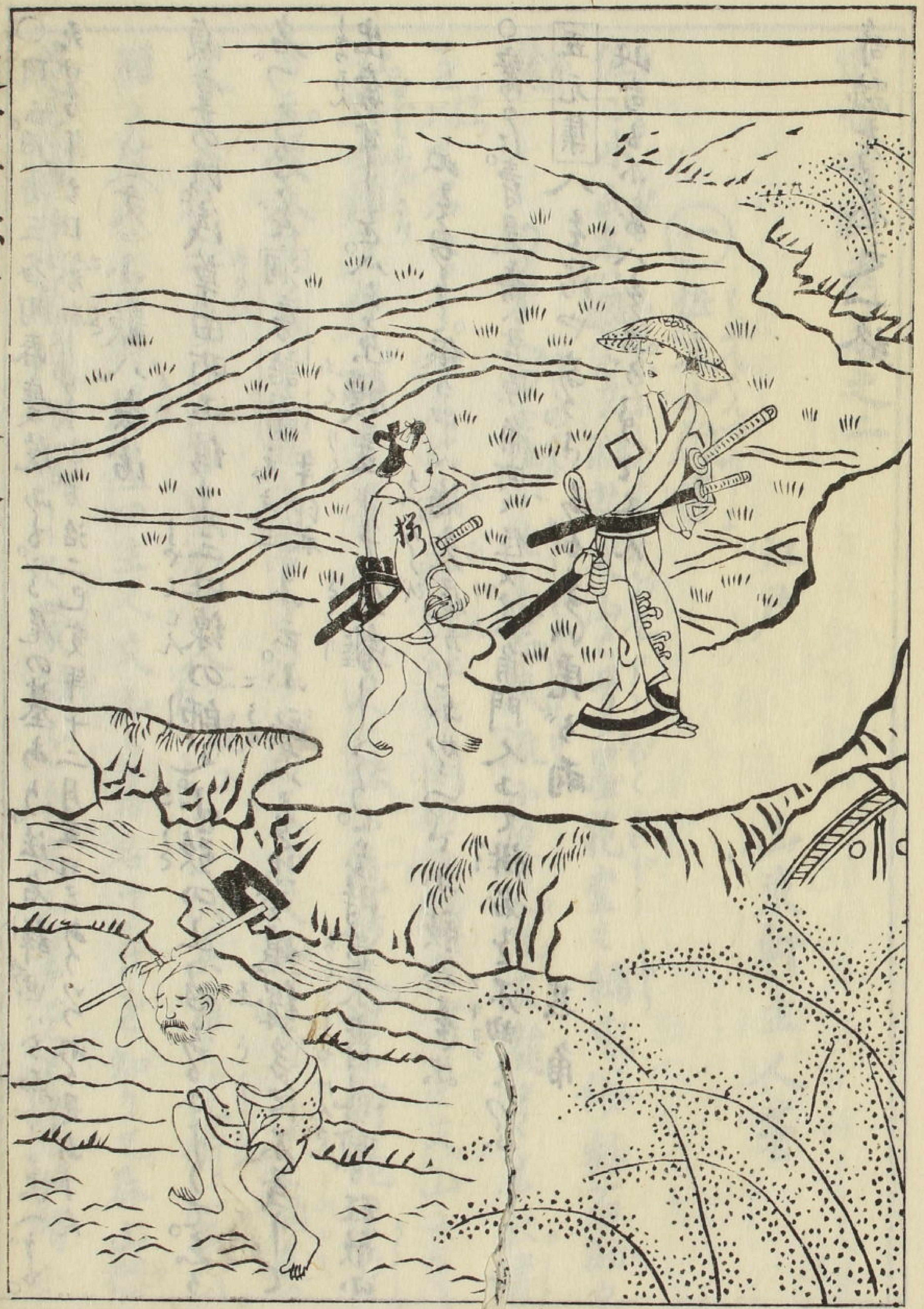
欒實のあたりたるあとあり

此金具ハ後につけて垂撥にしたるものゝ

万治中の高尾ハ紋かくのごとし此羽子板に春の字あるをもつて予が考あれどもこゝにハもらしつ

土手道哲菴圖（とてのどうてつあんのづ）

延宝六年板
菱川繪本ノ
畫ヲ摸ス



○附云。同所三谷町春慶院にも。高尾の墓あり。法名辞世ハなほ下にいへり。
死せる年ハ日ハなほしらず。万治二巳亥年十二月五日とありて是なりけん

(十八)小歌八云清

貞享の頃。浅草田町に住し三味線の師へ。小歌の上手なるによりて。志ら
名づくるとぞ【洞房語園】元文三年印本に云。小歌ハ玄宗が娘。釋多ニ不仕しそ
出奔せしを。八云宗腹立して久離しける。ころ時並木壽時見斎が狂歌に

ぬるも寝るも娘が中ハ海老尾かもにかつるる小歌ハ玄宗

○案るに。壽見斎ハ吉原角町に住ス。其角門人にて俳名を不曲といふ

【五元集】八云清やあらざるまい虎が雨　其角

此句も小歌八云宗がうとなん

奇跡考巻之一終

近世奇跡考巻之二

江戸　山東軒主人著

(一)佐文山戯書

佐々木氏名ハ襲。字ハ淵龍。文山と号シ。墨花堂と称す。俗称百助。玄龍の弟也。西窪に住む。志風流に厚く。兄玄龍とともに書を以て名高し。画にも都鄙神社佛閣の匾額皆書を文山にもとむ。性甚酒を好み。酔裏筆をとる人ハ殊に絶妙也。世に酔龍の後身と云。榎本其角ハ玄龍に書を学ぶ。画にも文山とあしく酒友の交りなりし。一日文山冨家の主人(一説に紀文ト云)およびて其角と花街に遊び。酒たけなハなる時。揚屋の主人文山が書名あるを知りて。春山櫻花を画ける屏風を出して賛辞をこふ。文山筆をとりて此所に

便無用の書も。主人これを見て頗不興の色あり。其角筆をとりて。
こゝにつぎて花の山を書つひに俳諧の一句となる

此所小便無用花の山

主人大によろこびつひに家宝となせり。其比あづま童の口ずさみに。此に
小便無用佐文山をとりいれいひはやせり

此事世に伝へて風流の話柄となる。文山享保十年乙
卯五月七日病て没す享年七十七芝増上寺塔中浄蓮院に葬る

㊁ 紀文伝

紀伊国屋文左衛門ハ材木問屋を家業として。世にきこえし
豪家也性活気にして常に花街雑劇にあそびて任侠をこのみし
千金をなげうちて快しとなす故に時の人紀文大尽と称じて。嫖
名一時にたかし。宝永の頃まで本八町堀三丁目にて一町紀文が居宅
あり。毎日定りて客さし七人づゝ来りて客をさそこ八客をむかふる
度にあらたしき客をまきいるゝなりとぞ。此一事をもつて。その
豪富なるを知るべし。また紀文が家に出入せし客座の子孫今松本
八町堀二丁目にありて此事をかたりき。又一時揚屋町泉屋平四郎
がもとにて升に小粒金を入て蒔あるきしと云伝ふ。正徳の比家お
とろへ剃髪して深川八幡一の鳥居の辺に住しが。享保十九年四月
廿四日。其隠宅において身まかりぬ。深川霊巌寺塔中浄等院に
葬る。法名を帰性融相と云

紀文俳諧を。晋子其角に学び。千山と称す。紀文其角。敬雨等と交り
しかうし證左にあらはれ

[五元集] 千山宅にて
剃まぞや八乙女か楽男より　其角

紀文追儺(ついなの)図(づ)

曰　千山ヨリ菊ヲ得て

大毋衣のうしろを押や瓶の菊　　曰

隅に巣を添ることそめでたく千山亭新宅雪舟の絵に

五月雨　　曰

朽葉集　千山亭にて

ありうへも老の眼や土用干　　敬雨

曰　悼紀文亡父

手あぶりやそもちに中ぞる膝のうへ　　曰

○紀文は一代の冨家なりしが。おもふ人なれバ既に父あり。父紀州熊野よりきて

その女撰　菊のちり　江戸にいでゝ一代にとみけるとぞ

三壊の措もにほゐまで裏の菊　　千山

香非時　に其角一周忌に紀文が手向の句あり

黒方や年ハ経れども朧月　　曰

類柑子　に風流をこそぬきの飛花を措むとかきて左の句あり　是も其角が追悼の句之

今もいま錦繍の人よふこゑ　　曰

紀文がうへにつきてハさまぐの奇談あれども。人口に伝ふることゝなれバ。たしかなる証もあらければ。これにもらしつ　後ハ昔丸と号ス。語に寛延の頃。俳諧

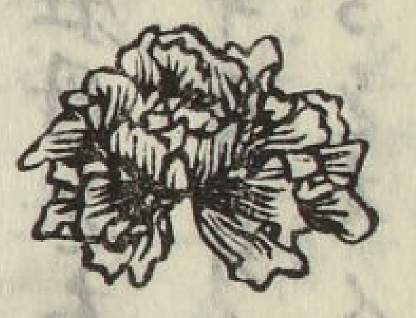
師存義。小網町より深川八幡一の鳥居の北側にうつり住。其庵ハ紀文が衰へて後住りる家なりと云くめつらしき語なれバ記しおきつ

㊂ 宗珉一輪牡丹目貫

宗珉横谷氏。名ハ友常。遯菴と号す。俗称次兵衛。檜物町に住す。一輪牡丹の目貫と云ハ世に一具の名物也。傳へて云。宝永の頃紀文宗珉に牡丹の目貫をのぞみ。手附金十両をおくる。三年過るにいまだなりがたきゆゑ。紀文侍佗て。あまりに催促せしかバ。宗珉が意にかなはずとて。手附金をかへさぬ。其後やゝ過てなり上りたるを。それ紀文にあたへさるゆゑ富家某にあたふ。某。金五十両を以て謝物とし宗珉にくれける。生涯一輪牡丹をなさぬぞ世に一品の名物になりしとぞ。宗珉享保十八年夏身まかりぬ

彼目貫某氏の秘蔵なるを。友人戸張氏。まうけて一着して。露なる所にかへりて図をさしめて下にあらはす

惣金



宗珉作

ありつけらくのごとくこゝにあり

④久米平内石像考

浅草寺の境内に久米平内の石像と云ものあり。何人の像と云ことを詳ならず。瀬田問答に云、氏ハ久米にあらず。兵藤平内と云。妻ハ久米氏也。ゆゑに世に誤て久米平内と云。菩提寺ハ駒込鰻縄手海蔵寺大智山と云禅寺也。こゝに青き生石の夫婦同會の墓碑あり

兵藤氏　無関一素居士

久米氏　松室瑩壽大姉

右の法名ならびでゑり付あり。此碑平内が来。存生の時建置き。死後に死せる年月をゑり入ざれバ其年月詳ならざる所。浅草寺。平内が来石像のかり家のうしろに。又同會の墓碑ありて年月をゑるを

上ニ仏像アリ　無関一素居士　天和四癸亥年六月六日

松室瑩壽大姉　貞享二乙丑年十二月十三日

案ニ癸亥ハ天和三年にあたる。これも平内が来存生の時建おきたるを後に年月をゑり入るる時の誤ならめ

かくのごとくなれバ。死せる年月ハあきらかなりといへども。いづれの家に仕へし武士と云ことを。諸説こと異なりして詳ならず。浪人して赤坂に住とも云。浅草寺後門の外金剛院に借地して住ともいへり。強勇の者にて。鈴木九太夫入道正三石平道人ト云因果物語二人びくにの作者の門人となり。仁王座禅の法を修行し彼石像ハそのかたちなりとぞ

⑤右近人形

【已往物語】写本に昔右近源左衛門と云若者京都より下り三味線引
一人ぢうたひ一人にて藝をする時今のかつらなどと云ものなく黄いろ
のふくさものにてそぎ髪を付額にかふりて月代をかくせし面体奇
麗の若者なれば。女のごとくにみゆる。此藝は海道下り。山崎下り
などと云。道行の歌を地うたひにうたはせ。これを小舞にして舞ふ。
又は業平餅。銭買などに小歌を独狂言に舞ふ。諸人おもしろがりてん
物を。此源左衛門黄なるふくさもののかふりたる体を。人形に木にて
も作り紙にて張ぬきにも作りて。おびたゞしく賣ると云こと
案るに寛文二年。市村座にて。源左衛門海道下りの狂言をせし
こと唱哥并に骨董集に詳也

⑥ 小兵衛人形

江戸に名高く聞えし。坊主小兵衛と云俳優は。延宝。天和。貞享

の頃まで盛に経たる人。外形さへぐらゐ糸鬢にてかりそめに見れば坊主
のごとくなれば名づけてかく呼べり。同時に坊主百兵衛。坊主段九。小坊主など
いふ俳優あり皆小兵衛をまねびたり。元禄小兵衛が女形を五月
の頃人形に作りそめて。これを小兵衛人形といふ。其後段十郎
に太夫などをも頃人形に作りしとぞ　以上元禄六年板本【四場居百人一首】に見ゆ　其角が
小兵衛人形の句左の如シ

【五元集】

此友や年をとるとも白髪二毛の身をそのまゝにて松どの左郎
どのあやつりとのみ見れば今の人形の風俗　さらに小兵衛な
どいふ人形ハなし

我むかし　坊主も夫や　花薊　其角

同

坊主　小兵衛坊主と申　見れハ
坊主小兵衛ゐる心して々小兵衛坊主と
小兵衛小兵衛坊主とかれ花　同

案るに。小兵衛ぜき羽おりを好みて着たり。その頃の世俗にかんざ無の坐羽おり。この
ゑいつべしにもてはやしやとうたひしより写本【洞房語園】にも見えたり。二朱判吉兵衛が大尽
舞に小兵衛の坊主無の坐羽おりを作りしも見え【本朝文鑑】に支考が狂名をも坊主
仁平とよびしも小兵衛にあやかりてつけたる名なりといへり。世にめでられたる者をおもふ

右近源左衛門舞圖（まひのづ）

古画ヲ摸ス

元禄六年印本四場居（シバヰ）百人一首ニ此圖アリ摸出ス

上ニ狂哥アリ畧

坊主小兵衛

談洲樓藏本

七 羽生村累古跡

下総国岡田郡羽生村百姓与右衛門妻かさね。正保四年亥八月十一日夫与右衛門が為に絹川において殺害せらる。是を今にかさね淵と云。与右衛門後妻をむかふる事五人。みなかさねが為に取殺さる。六人めの妻娘きくを生む。きく十三の年。寛文十一年亥八月中旬。その母も又取殺る。翌寛文十二年子正月四日より累が怨霊又きくにつきて苦しめけるを。同年三月十日。祐天教化にあひて。かさね成仏し。きく一命をまつたうす【死霊解脱物語】元禄三年板本【新著聞集】寛延二年板本等にしるして。人よくしれる事なれバくハしくしるさず。なをよく案ずるに。与右衛門堀越氏也。かさね実名るいと云。累の字かさねと訓ずる故に。かくハよびけるならめ。法蔵寺の過去帳に俗名るいと

あるを以て証とすべき歟

○芭蕉が【奥の細道】に下野の那須野にて。ちいさきものふたり。跡をしたひてはしる。ひとりハ小姫にて。名をかさねといふ。きかぬ名のやさしかりけれバとて。曾良が句に

かさねとハ八重なでしこの名なるべし

とあり。これも累といふ名を訓にてよびしならめ。かさねといふをきゝなれぬ名のやさしとおもへるハ。元禄の頃ハ羽生村のかさねが事さまで世にしられざりしにや。与右衛門後に剃髪して西入と云。延宝四年六月廿三日死す。其子孫今もなほ羽生村にありて。代々堀越与右衛門と名告る。当代にて西入与右衛門より五六代相続を守ぬ。きくハ長寿にて享保十五年戌五月三日。七十二歳にて身まかりぬ。同村羽生山法蔵寺ハ与右衛門代々の菩提寺也。累。助。きく。三人の墓あり。累助成仏得脱の絵曼陀羅あり。明顕瑞祥録と云古書二巻あり。かさね等が事跡を録せり

法蔵寺過去帳写

理屋松貞信女 俗名ろい行年三十五 正保四丁亥年八月十一日。初法名香誉妙林

單到真入童子 俗名。助三。歳。寛文十二壬子四月十九日此年号八助

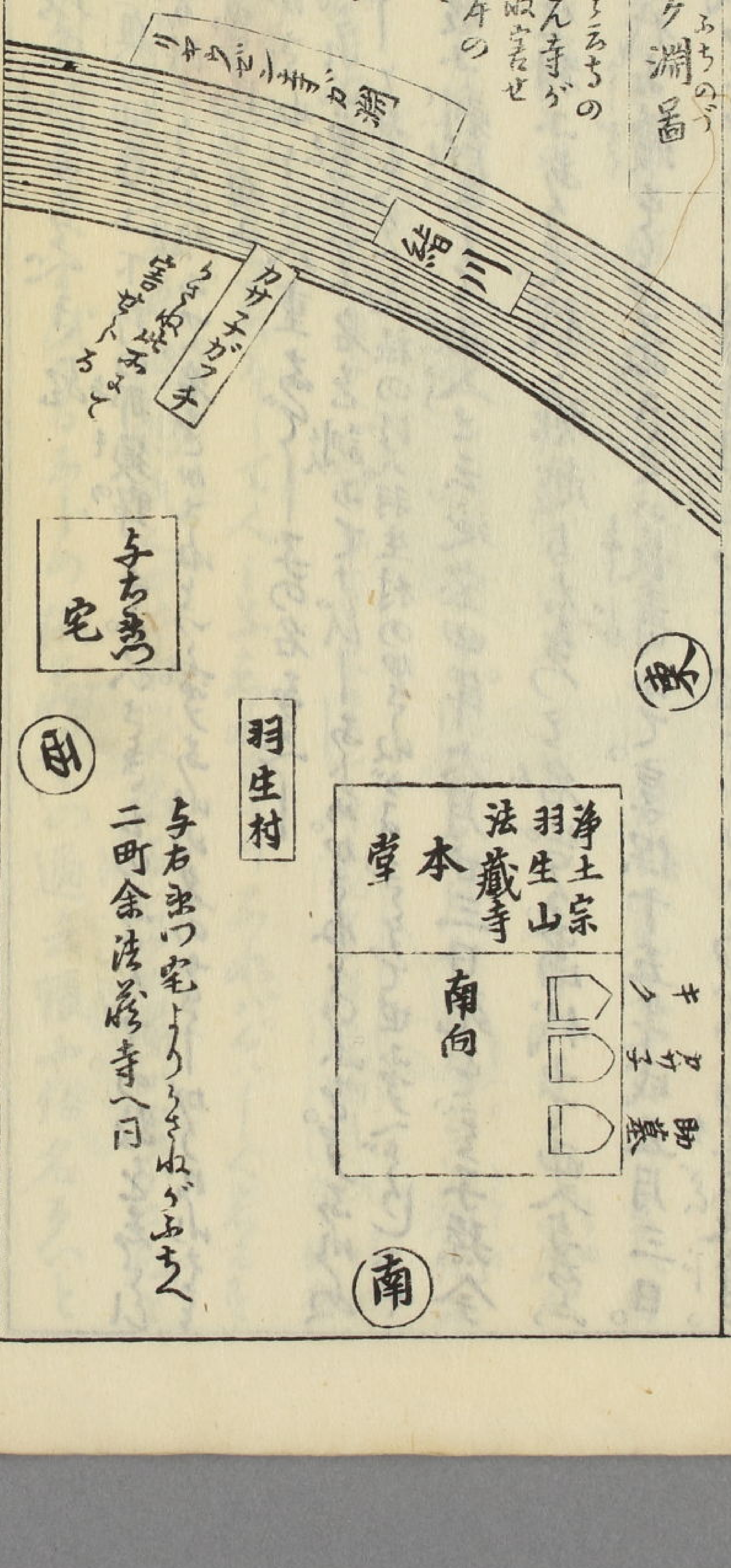
得脱の年之実ハ慶長十七壬子年四月十九日死

榮譽不生妙槃信女 俗名きく行年七十二 享保十五庚戌五月三日

以上

絹川累ヶ淵図

こゝをぜん寺と云ちの下をこゝをぜん寺がふちと云加さね害せられし時此岸の柳のかげにて法恩寺村清右衛門と云者始終を見とゞけしと云伝ふ清右衛門子孫今にありとぞ



八 歌比丘尼

殘口之記 ニ歌比丘尼むかしハ脇挟し文匣ニ巻物入て地獄の絵説し。血の池のけがれをいませ不産女の哀を泣せる業をし年籠の戻りに。烏牛王配りて熊野権現の事觸めきこえしがいつのほどよりかくし白粉落紅つけて付鬢帽子に帯をも廣く成し云々下畧

東海道名所記 万治中板本 云。比丘尼ども一二人いで来て。歌をうたふ頌歌ハうちもそけられぬぞ。丹前ぶしやなげぶしありて。たゞありくそ長ぶしくひきうたりをもそのもとより次に柴垣明暦中はやりし小哥もとハ山の手の奴どもの踊歌なるを比丘尼簓にのせてうたふ。みどりの眉をそりて薄化粧し歯雪よりも白く。くろき帽子にて頭をあぢにつゝむ云々下畧。かゝれバ熊野比丘尼の風万治の頃をや変りけり

かさねおんりやうのづ
累怨霊圖

熊野比丘尼繪説圖

○【紫の一本】にめうが町に永玄。お雅。お松。長傳寺などいふ名ともある比丘尼あり。しよしを志すもの也。天和中のうちにめうが町ハ神田多町の古名也。此歌びくにとて今ハ名のミ残れり

(九) 安樂菴策傳落語

安樂菴策傳ハおとしばなしの上手也。元和九年七十の年【醒睡笑】といふ笑話本八冊をつくる。万治元年上木せり 此人茶道においても名ありしといへども。おとしばなしの上手なる事を知る人まれなり。世に称ずるの。安樂菴の列中ハ此人より出ぬ

(十) 露の五郎兵衛辻話

支考が【本朝文鑑】に露の五郎兵衛辻談義の説といふ文をのせて云。此者ハ東洛に名を知られて洛陽の仏事祭礼に彼が芝居を張ざる事なし。世に云辻ばなしの元祖也云々。延宝。天和の時代也。祇園真葛が原或ハ北野にはなしといふ露がはなしといふ草紙五冊あり

享保十三年印本徽雨の梅に此図あり
きくさくらしゆ　して　あるいきそ

延宝五年板本［かくれ笠］に

屋かゞ月におちくる初嵐　重高

芝居の露や顔におくらん　似船

案るに。此句屋かゞ耳におちくるとつゞきて。露の五郎兵衛が辻ばなしにみより出て連歌師が。露といふ字を質におきしといふ事を。ふくませたり［類柑子］に曰「命にかゆる五郎兵衛の露といふるあり。こゝは名をきゝを知る人上方のものや。ふらんはゞ江戸の志賀を新右衛門などいふべし

十一　鹿野武左衛門仕形話

元禄の頃江戸に。座敷仕形ばなしといふ事をはじめたる。長谷川町の。鹿野武左衛門といふ者。上手之趣の巻筆と云笑話本五冊をあらはせし。横山町三丁目。休慶中橋。伽羅小左衛門。同じく。伽羅四郎斎などゞみな其ころの名あり。貞享四年板［江戸鹿子］元禄二年板［江戸図鑑］に見えたり

（十二）大津絵考

大津絵。或ハ追分絵ともいふ。いづれの時代よりかき始しや詳ならず。元禄三年板【東海道絵図】に。大津大谷の辺。仏絵いろ／＼ありとしるせり。又芭蕉の句に

大津絵の筆のはじめハ何仏

かくれバ。元禄の比ハ仏絵をもつぱらにかきしとおぼし【本朝俗諺志】に。飛州の山中に。毛坊主といふ者あり。俗解にて常ハ農業を業として。人死すれバ導師となりてこれを葬る。本尊ハ大津絵の十三仏なりと云と。世に行へて。浮世又平がかきはじむるといへども。たしかなる証なし。案るに浮世又平ハ越前の産。本姓ハ荒木。母の姓岩佐を冒。よく時世の人物を画によりて。時の人浮世又兵衛と称す。世にいはゆる浮世絵ハこれにおこる歟。又平といふハ誤り也。享保四年【傾城反魂香】といふ浄瑠璃に。土佐の末弟浮世又平重起といふ者。大津に住て絵をかきてうるよしをつくれるより。妄説を伝ふる歟。或ハ別に大津又平といふ者ありて。かき始む。享保のころまで其子孫ありしと云。予がおもふに。ふるき大津絵に。八十八歳又平久吉とかきて花押あり。前の説のごとく。大津に又平といふ者ありしを。浮世又兵衛が事にして。かの浄瑠璃につくりしより。虚説を伝へしならん。さハいへ。支考が【本朝文鑑】に浮世又兵衛ハ大津絵の元祖といふ【文鑑】ハ享保三年の板なれば彼浄瑠璃より一年まへなれバ。其前より云伝へしなるかもしらず。とまれかくまれ【好古日録】にあるまて。又兵衛が作をとゝなふ。

大津にて寫画をかきしなり。あるべしともおぼえず。予又云又平が正筆を求めて其画風を見るに。大津絵をかくべき風なし。あれども古代の大津絵を考ふるに。古土佐の風味ありて残れるやうにおもしろ

貞享四年印本[風流旅日記]に大津追分伏見の道の中略奴半持のいきなひのあい絵をうるが大谷云く見れば貞享の比已に奴の鎗持なる絵ありしとおぼゆ

⑬辰之助鎗踊猫狂言并肖像

水木辰之助は元禄中諸人に知られし。歌舞妓の女形なり元禄四年。京四条より始て江戸に下り。市村竹之丞座。顔見世に四季御所桜と云四番つゞき狂言を興行せし。是を辰之助が土産狂言と云。辰之助なる姫の役第二番目に鎗をどりの所作。第三番目に加ゝ猫の所作をせしに。江戸中こぞりて賞美し。此狂

言を見ざるをはぢとせしよし。○猫の所作の意趣は。ある姫の中くみにて恋をしかけし男。我実の兄あることをしられて失ひし故くさきんを。かなしむ折に。兄弟のねこの恋をするを見て。うらやみつひに我狂ひてありて胡蝶にくるふ狂言也。これを辰之助が女との狂言とて。むかし人のちくまでもわすれぐさにせしとぞ

[焦尾琴]

猫恋句合

疑恋

花の夢胡蝶に似たり辰之助　其角

寄舞妓恋

恋種の猫の狂言あけにけり
辰之助にやつれけれ　堤亭

[五元集]

煤掃や諸人がまねる鎗をどり　其角

これは其角の句なれども此節の狂言なり。[新板四季御所桜]といふ書四冊あり。珍しきなりけれど見し。是内絵をどりと猫の所作の図をそのまゝにうつし画にして下にあらはす○鬘又にいひもせつくるなり辰之助よりえじまるよし[哥舞妓事始]にみゆ。○元禄十三年市村座において辰之助七変化の所作を工して大あたり也しよし。是七変化のはじめ也

元禄四年狂言本
四季御所櫻三の巻に
此圖ありまとさくつ申して
はのかくりもろがえまで
いぞせり

京 川津山白藏本

同書三の巻ニ
此圖あり

元禄十三年板本遥男万評林ニ此圖アリ是スナハチ辰之助が肖像ナリ

木村太朝蔵本

水木辰之助

奇跡考巻之二終

近世奇跡考巻之三

江戸　山東軒主人著

㈠古画相撲圖

下にあらはせる相撲の古圖ハ。時代詳ならざれど。画者四明といふ人。又詳ならず。後の明鑒を俟のみ。相撲大全を案るに山州千菜寺八幡宮再建に付。正保二年六月。下鴨會式の内。十日が間興行せり。是京都勧進相撲のはじめなり。江戸ハ寛永元年。明石志賀之助寄相撲と名づけ。四谷塩町にて。晴天六日興行せり。是をはじめとす。大坂ハ元禄五年。袋屋伊右衛門と云者。南堀江高木屋橋筋立花通りにて始て興行せり。下の古圖かこひなく見物の意にまかせてみれバ。是ハ神事相撲なるべし。寛永中江戸祢宜町にて。勧進相撲ありし事。寛永二十年卯年印本あづま物語同年卯年印本吾妻めぐりなどに見ゆ

古画相撲圖　縮圖

右絃の上左右に此圖あり一紙にをさまらざるを以て別にあらはす合せ見るべし

武清所蔵

(二) 牛若木偶衣裳

家翁曰操芝居牛若の人形。歌舞妓芝居牛若に扮する衣裳など。鳥居。玉垣。三本杉の摸様を付ざれバ牛若と見えず。今にあらハーとあれど。其本據を知る人まれ也。昔土佐の芝居ハ人形を以て能を舞せ。合間に浄瑠璃をかたりけるが。寛永二十年板[ある物語]同年板[吾妻めぐり]を考るに。祢宜町に土佐が能ありしことを記ス。これは牛若の人形にかの摸様をつけし。これ幸若のうつしもの。

烏帽子折といふものゝ文にもとづきて付たる模様のよし。予がをさなかりし時。八十余の老人のかたるをきゝしに。家翁椿壽斎信明 寛政十一年没享年七十八 存生の日ものがたりしは。家翁ハ享保七年の生なれバ。かの八十余の老人ハ寛永中の事をも近くきゝたる人なるべし。これらの物語もせめてわすれがたみとおもへバ。かきつけおきつ。さる頃日かの烏帽子折の印本を得てみるに。牛若のいでたちをいふ条に。左のごとくあり

召たるひたゝれハ。かうらいきぬをもつて。地をバ山鳩いろに。一もんすゞしをちいて十八五しきのいとをもつて。ものゝ上手がぬひものをありくとぬふてゆ。まづゆんでのひもつけにハ。井垣。鳥居。社壇をぬひめて。それひもつけにハこけたるべに。杉を三本ぬふて云々 下畧

かゝれバ家翁がいふにたがハず。右の紋ハよりてつけたるも。ゆかりある事なるべし。かゞりのもの昔のもののぞきにハ必よりどころありかりそめにえまざりし

三 浅草並木櫻花浅草寺船形手水鉢

寛永二十年印本 吾妻めぐり といふ草紙二冊あり 杏園蔵本 浅草の並木に櫻ありし事。浅草寺に船のかたちの。手水鉢ありし事をしるせり。いにしへをおもふべきすがたなれバ抄出して左にあらはす

吾妻めぐり 下の巻に

めぐりくて浅草の。ふるき御堂ハこれなるよ。右庵もちやくつきにけり。並木の花ハかづ咲て。木も葉に光りうつりましかたちをかげのあら。そふハ連理の枝ぞ。相生の松かと。これをうたがハれ。よしの山峯の春とても。これにハいかでまさるべき。中畧 御堂になれバ手水鉢。ちからおよばぬ大石を。船のかたちにつくりなせ。中畧 きよらかちからい観世音。二世安樂とさせへして。うちの尺つけをあがむれ

ハ獅子に牡丹に竹に虎。栗に志んきう。水に犀。鹿に紅葉。是舞
鶴二ツ。君のよハひをちとせまで。久しかれとぞ舞ならす云と下略
初かれハ寛永のころまでハ駒形堂より今の並木町の辺迄て浅草寺の境
内にて桜の並木ありしとおぼし。又観音堂回禄以前の荘厳みるべし

[同書] 上巻ニ

田くへいりみち志ふつ田の。そぞ志にむすぶあさ草をぶちらえ
ゆけバおぼちなく。むさしの江戸につきにけり云ミ。下略

かくのごとくあれバ寛永のころまでハ浅草ハ江戸のうちにハ入ざりしにや。
寛永二十年より。文化元年にいたりて。一百六十二年におよぶ

㊃ 吉彌結帯

延宝のころ。上村吉弥といふ。歌舞妓女形の始し。帯のむすびを吉弥
むすびとて都鄙おへてはやりぬ延宝九年印本[都風俗鑑]と云杏園蔵本
帯のむすびハ吉弥むすびとて唐犬の耳たれたるごとく二ツむすび
のあまりをごふりとさぐるぞ帯屋どもハ心得尺ちさきをこしらへ。
吉弥結ハこれなりと。並段ひとさきハまるし云と 是にてそのむすびやうも志れたり

○元禄四年印本[朶下地]と云書て鉛の売買するを秘しハ吉弥むすびの帯
のをしふいろ田舎とや云こ。かの唐犬の耳のごとくたれたるもしにあまりを入ふや

㊄ 岡崎女郎衆

をか崎女郎衆といふ小歌ハ。寛文より元禄のころへかけて。一節切にも三
絃にも合せて。もつぱらうたひたる小歌之。元禄十二年印本[紙鳶]と云
一節切の書に譜をつけてしるしたるをみれバ左にあぐ。ハ
まそ。又寛永廿一年印本[あふむ新つれぐ]蜀山翁蔵本と云草紙にをうざ紀を
どりと云小歌をつくし琴に合せて。むさくるしをしるさこれによれバ
寛永のころよりはやりし小歌餘むりしあまたありける小歌のうちに。これのこ
一百六十余年の今に残りてうたふハ免づらし 此小歌ハつきてハ別に考へあれども こゝにハもらしつ

▲おくさん

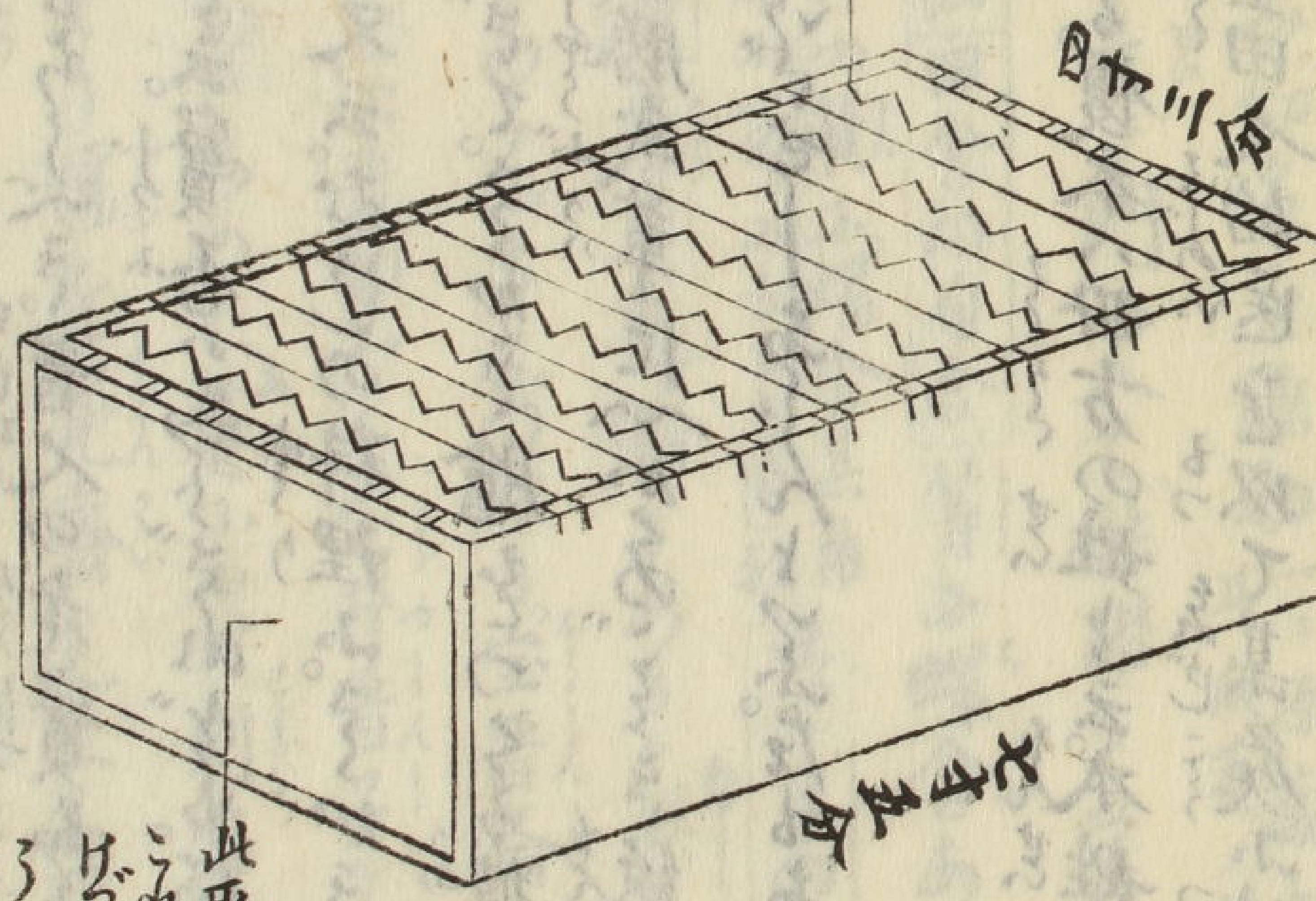
やり、ヒ 上 上 上。やり、ヒ 上 ヒ 上
おかさんぢよろ遊ばとらふさんぢよろしや。
やり、ヒ り、セ やりやヱ ウ ホ ウ
れうさきぢよ孫遊ハよいぢよ孫しや。
やり、ヒ り、ヱ やりやヱ ウ ホ ウ
とうけきぢよろ遊ハよのぢよろしや

(六)古代山葵擦図(こだいわさびおろしのづ)

古松軒記に云、武州葛飾郡青戸村(ぶしうかつしかこほりあをとむら)ハ、青砥左衛門藤綱(ふぢつな)の第宅(ていたく)ありし所といふ。往古ハ青砥村とかきしを、中ごろより青戸にあらためしといふ。此村の農人(のうふん)茂右衛門と云者の家に、藤綱がもちゐしと云傳ふる山葵(わさび)おろしといふ

杉の四分板を以てつくる

この竹のあつさをものとぎりのごとくにしそれを左右の板へさしこみ上より竹のふちを打てうごかぬやう中の竹のかどにて大根にてもわさびにてもけづりなどもやうにせしものなり
○今も辺鄙(へんぴ)まハ此器(うつハ)をもちゐる所ありとなん



上にあらハれて酉のごとき古器を蔵せり。みる所不調法の物にて今の世の人誰かかゝる不便なる物をもちふべき。昔人の老實なる風俗を察しるべし。藤綱がもちゐし云寶香ハ忘れざれども何にまれ目なれざる珍じき器といふべし云々。又云。むかしの料理にさかき膾といふありて今もいなかの日にハ大根をへぎて。さかき膾をつくる。彼器にて大根をおろすにハ。志からん。或人云勝武革にハかゝるごとき紋あるを山葵おろしと称す。彼器の形より云いだせしなるんといふにもあらん歟云々

七 榎本其角傳

寛文元辛丑年七月十七日生る。榎本ハ母方の姓と云。本姓ハ竹下。一ニ竹内ト云 其爪菴ノ説之 父を東順と云。江州堅田人。始医を以て某侯に仕へ辞して後隠者となる。曾て和歌連歌俳諧をこのむ。由良ハ扇たゞ正春を師とす 元禄六年八月廿八日没す亨年七十二。芭蕉菴こ傳を作る 卅八貞享四年四月八日没す。其角幼年の時神田なる池にすみ。幼名を源助一ニ源藏ト云又 其爪菴ノ説之 といひしとぞ。翁 蘿翁 説あり 延宝のはじめ。桃青が門に入て俳諧を学びし【五元集】にみえたり。十四五歳の時にあられり【延宝二十歌仙田舎の句合】等に螺舎あるハ螺子とあり。初名なるべし。一蝶かゞかけの賛に螺舎其角とあれバ後にハ号にもちゐし歟【汀ぎさの原】に麒角ともかけり【江戸廣子】【江戸畧鑑】等に亀鶴とあるハ誤なるらん。晋其角と称せしハ【易経】に晋其角とあるにもとづけり。宝晋斎ハ米元章が硯に鐫たる文字也。其硯を得て。宝晋の二字宝井晋子と云によくかなへりとて。佐玄龍に扁額をかゝしめて。菴にかけ則宝晋斎と号せしよし【五元集】にみえたり。幼年より儒を寛齋先生に学び。医を草刈某に学び医道の名を順哲と云。其爪菴説ナリ 詩を大巓和尚に学ぶ。

其角ノ書始メ玄竜ニ学ビ中ゴロ米元章ニヨリ後ニ日蓮ニヨル

書ハ玄龍に学びて後一家の風をなし。画ハ一蝶に学びぬ。嘗てりふり町（實名堀江町）木履を商ふ家のうちにすみて狂而堂と号す。貞享の比嵐雪（此時服部彦左衛門）破笠（此時小川平助ト云）等其角と同居せしよし【破笠自記】および古栢莚日記【老のたのしみ】（写本）等に見ゆ。【江戸鹿子】【江戸図鑑】等に其角が住所堀江町とあるハ則てりふり町の事也。幼年より此に住しとおぼし。元禄三年板【いつを昔】に居をうつしてとかきて

「嵐にもゆかでなどまん冬籠　とあれバ。元禄三年の冬。てりふり町よりいづくへか轉宅せしなり。【五元集】に神明町に居をしめてとかきて

「行合の松もかてぞきかざり竹　とあるを。考るにてりふり町より神明町へ轉宅して。あくる春の句なり。【皮篭摺】に六月廿日居を轉して。竹三竿をうゑつけるに。頻にふところびたる声ありてとか

きせ句あるハ。元禄十一年の事也。しかれバ元禄十一年六月廿日。神明町より又轉宅せしなるべし。【同書】午寂が句のはしがきに晋子南瀋にうつり竹を植て有竹居と号すとあり。南瀋とあれバ神明町を轉宅せしも。芝邊のやうにおもはるる。元禄十一年十二月十日。池魚の災にあひて家をうしなひたるよし。【焦尾琴】の序にあるハ。かの南瀋に居住の時なるべし。【焦尾琴】の跋を見るに（此比已に妻子あり）【五元集】に類焼の後辺鄙の居を問て一樽に雞卵をおくる人をかきて句あれバ彼芝邊に類焼の後。しばらく邊鄙に住しとおぼし。辺鄙といふハ。いづれの所にやつまびらかならず。【和漢文操】に其角が号雷柱子とあり。【うら若葉】【類柑子】等をこゝろみれバ。渉川ともいへり又狂雷堂。六藏菴善哉菴　文合菴（元禄十年歳旦帳ニアリ）等の諸号あり。画名を暑子といひ。

しハ折ふふれての戯号なるべし。元禄のころ茅場町薬師堂の辺に住ぬ。類柑子に草庵の記あり そのちかきあたり植木店といふ所ふ徂徠先生の家あり。其角が口ずさみふ。○徂来翁そのころ蘐園と号ス蘐ハ萱とおなじ是茅場町ふ居住の証なり

梅が香や隣ハ荻生惣右衛門

此句いづれの集ふも見えざれども。もつぱら人口ふ残れり。實否ハ志らず。宝永四年丁亥二月晦日没す。享年四十七。二本榎上行寺に葬る。法名喜覚居士又深川森下町長慶寺ふ墓碑あり。其角病床ふ画し。無眼の達磨一紙をうづむと類柑子ふ見ゆ。同書白櫻が其角をいたむ句のはしがきに。此所ふ年ひさしく住なれぬれバ。鎧の渡守も袖をひかえとあれど茅場町ふ住し時。身まかりし事あきらけし。宝永四年二月廿三日春曉闇炉ふ坐して吟とて

鶯の暁寒しきりぎりす

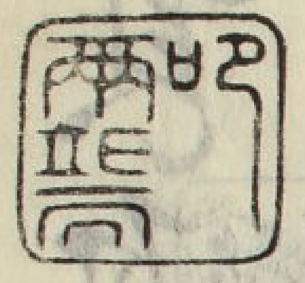
として。病ふふし。むづかし七日を過て。身まかりけるよし類柑子青流が文ふ見ゆ。是其角一生の口ずさびのかぎりとなん本朝文鑑ニ辞世ト云ハ非也

▲其角著書目録

田舎句合 一 延宝八
みなし栗 二 天和三
蟲蝨集 一 貞享元
新山家 一 同二
続みなし栗 二 同四
花つみ 二 元禄三
いつを昔 一 同年
雑談集 二 同四
萩の露 一 同六
枯尾花 同七
句兄弟 三 同年
若葉合 一 同九
裏若葉 一 同十
錦繍段 同年
三上吟 同十三
焦尾琴 三 同十四
これら家 一 時代不詳
新二百韻 一
類柑子 三 遺稿 宝永四
五元集 四 同上 延享四
新三百韻 一
以上二十一部

▲其角印譜

青山白石の印ハ人の知る所なり これらハこゝにもらしつ



叩両端

宝井其角

其角（印）

沉香亭裡

点印

越雪　五点

洞庭月　七点

半面美人　五十点

一日長安花　十点

右点印傳系〇其角―秋色女―湖十
菊后亭　木者菴。寛改壬丑年六世雪囱湖十ヨリ其爪菴ニ附属ス
點印半面美人の字を彫て琴形の中に備ふるをはじめて
冠里公の万句の御巻て押弘め侍るとて

五元集

春の月琴に物書はじめ哉

案るに秋色追善の集両三声冊をみるに元禄十五年の春。半面美人の印を新刻して賀會の一集成かの琴に物書の句を発句として二十五吟の百韻をつらね。集冊の名を月の鶴とよびけるよし。其後廿四年を過て秋色庄より初代湖十に譲りけるとぞ

七月十七日出生ノ記ト云〻

〇其角正筆自記の切レ二葉を書画房主人蔵せるその文左のごとし

▲毛引ある紙に書ス

寛文丑

[illegible]寛文元年

七月十七日

母霊夢

人目おいろるとみてくらわくはの
影しら波れ室おふくおれ

七夜

同

住吉の松を秋風吹くまで
あをうちそふる沖津小波

初年ヨリ堀江町ニ居住ノ証トスベシ

十歳入学　大圓寺

十四歳　於堀江町　本草綱目写

従詒　主治　発明

十五歳　内経素本　易経素本写

五郎兵衛需之伊勢物語書之

右表紙出来本　段々拵之

右之襲義として刀　中諸に

十六歳

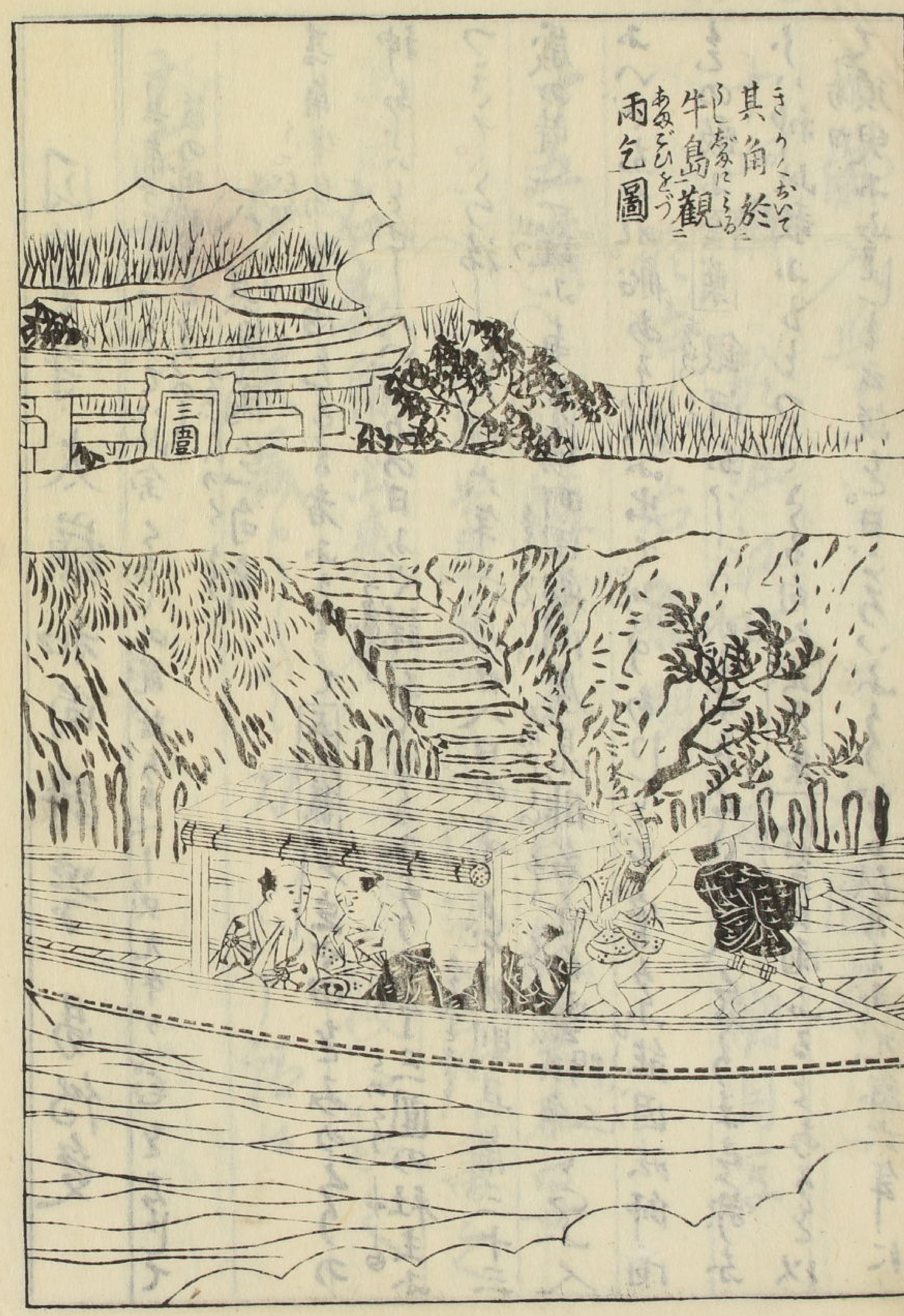
因覺寺太巓和尚詩学　易伝受

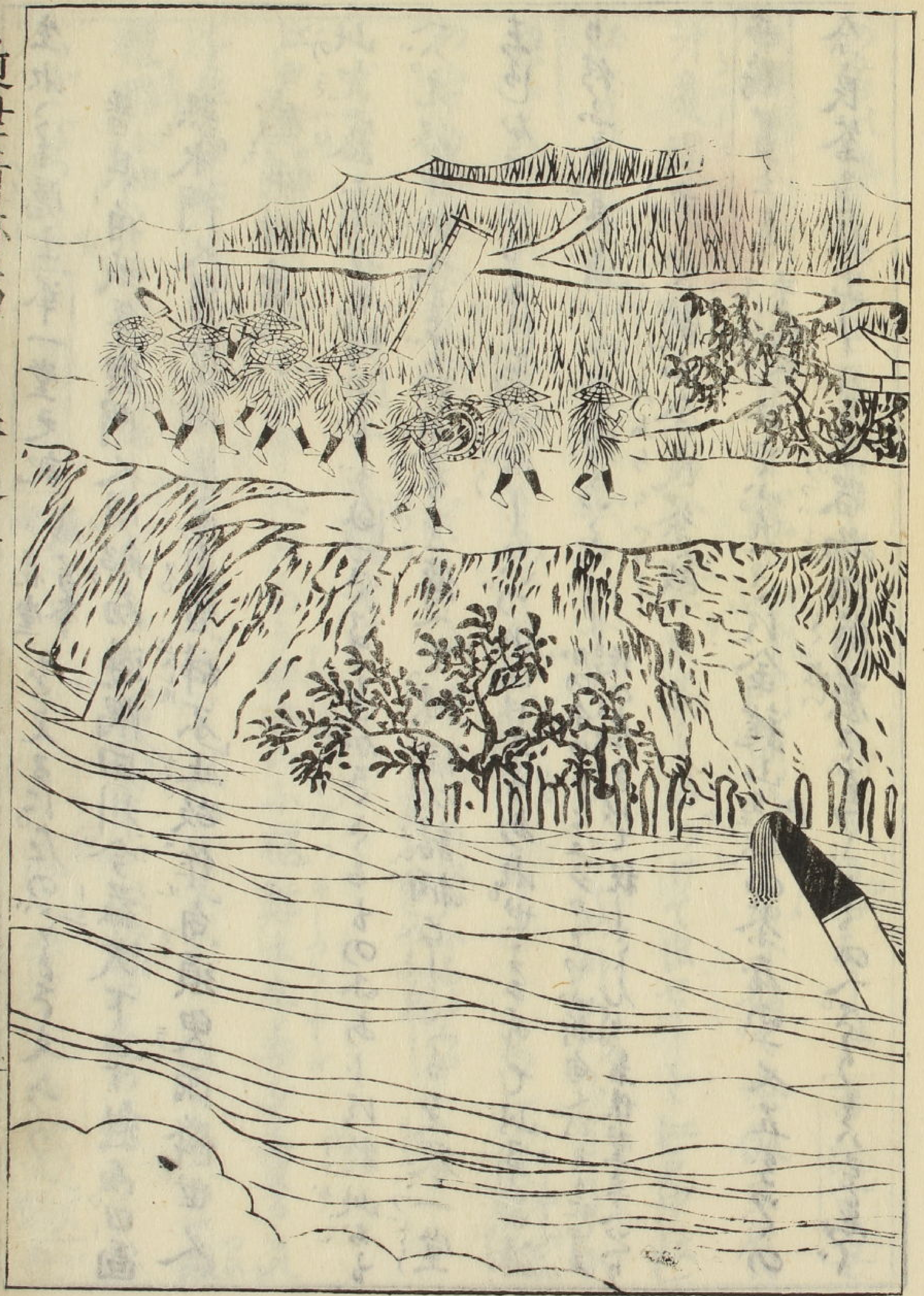
其角がうへにつきては此余くさくの説話あるべし只九牛が一毛を志るして後の明鑑をまつのみ

八　其角雨乞句考

其角牛島にて雨乞する者にかはりて[五元集]夕立や田をみめぐりの神ならばとせしは、いづれの日にや詳ならざるによりて予三囲の社主につきて問ひしに、元禄六年六月廿八日の事とぞ。然則其角三十三歳の時也。一説に南茅場町回船問屋某。俳名を白雲といふ人其角門人にいざなはれ。船あそびに出て此事ありしとぞ。案ずるに能因法師雨乞の歌に[金葉]銀河なはしろ水にせきくだせ天くだります神ならば神。此歌にもとづきたる句也[五元集]に翌日雨ふるとあるを以て。須臾にふりしと云説を。日ごろいぶかりおもひけるに。元禄六年に

其角於牛島観雨乞図（きかくうしじまにおいてあまごひをみるづ）





生れざる隠士【挙一堂之記】詞花堂蔵写本をえたり。左のごとき文あり

晋其角或年与門人同船而遊隅田川。今茲天下旱魃而田面無水。門人等望雨乞之句。晋辞不止。故作句。須臾雨降。世人感其俳徳云々

此記露ばかりもいつはりなし。さすがきこゆるものにあらば、於此おもへば元禄中の人までに此事を傳へて風流の話柄としけるを、挙一堂志しおきざるはあらじ。雨の降しはいづれの日にもあれ、世こぞりて此事を語り傳ふるは其角が為にまれなりといふべし かの句ハもとユタカといふ折句にて、そうに豊作の意を以て祝しけんとぞ。著作堂主人云り

⑨ 金龍山奈良茶飯

【西鶴置土産】元禄六年板本にいふ、近きころ金龍山聖天町の茶屋に一人五分づゝの奈良茶を仕出しけるに、器物の綺麗さ色々ととのへ、さりとはしほらしく、

の者れ勝手のよきことゝ中々上がたにもかゝる自由なし云々【事跡合考】云明暦大火の後浅草金龍山待乳山門前の茶店に始て茶飯豆腐汁煮染煮豆等をそろへて奈良茶と名づけて出せしを、江戸中はしばしより金龍山の奈良茶くひにゆかんとて、ことの外めづらしきことに興じたりき。それよりおひおひさまざまの美膳店出来しより、かしこ彼聖天の山下の奈良茶衰微におよびたりと云々 案るにこれ江戸にて茶やめしを賣るはじめなるべし

⑩ 芝神明千木櫃考

江戸芝神明の祭礼毎年九月あり。曲物の小櫃并土生姜を賣る。これを生姜市といへり。彼小櫃を土人ちぎびつといふ。杉木を薄く延ぎて飯櫃形に曲たるに丹と緑青とをもつて 如此藤の花の絵あり。此ちぎびつの説さまざまありといへども、みな安説也。案るに【風俗文選】吾

仲が飯鮓銘に云飯鮓ハいつれの時よりもてはやしけむ此六条の名物にハなりけり今ハおさおさ中けのなりものにかぞふれど下ざまの人ハ日を限りても待べしまして卯の花の咲ころハ此ものゝけしきも清らかなんに藤の花の咲時にそれが節をあはせたらんハ心ある人の深き心ゟ待らん覧にて二季草の名もせの人ハいふべし器物ハ杉の香もてつけたる折に入れて此花をかざしにも又ハ文などに付てやるべしかくことぐしさやうなれど並べて上ざまのもてあそびものなり下略かくのごとくあれバ彼ちぎびつハもと銘をつくる器にて藤の花を画きかざしめ給ふなるゆあきらけし生善をうるも銘にまそくちふものなれハなるべしちぎびつと云名ハもと社の千本の余木にてつくりしゆゑにあるハひろをぞ

再案るに大飯銘ハ京六条の人家にて製も飯銘に藤の花をそふる流例黒川氏雍州府志巻之六土産門にも見えし

奇跡考巻之三終